



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペー・ヤー・チャアダーエフ「哲学書簡」(翻訳及び解説) II
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 7, 105-144
Issue Date	1963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4968
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113181.pdf



哲 学 書 簡

ペー・ヤー・チャアダーエフ

外 川 継 男 訳

解 説 (2)

チャアダーエフの「哲学書簡」のより正しい理解のためには、その前提として、次の二つの作業が不可欠である。即ち、その一は、「書簡」の執筆に至るまでの、チャアダーエフの知的発展と、精神的遍歴をあとづけることであり、二には、より広い視野のもとに、当時の社会の現実の中にあつて、主として如何なる問題がチャアダーエフを含めて若きロシアのインテリゲンツィアをとらえたかを考察すること、これである。

したがって、以下においては、これらの課題にこたえるべく、「書簡」の執筆に至るまでのチャアダーエフの知的発展を、時代思潮の背景とともに述べることとする。

チャアダーエフの伝記は、今日までに幾人かの研究者によって書かれてきたが、そのいずれもが、近年になって著わされたファルク¹⁾やシュクリノフ²⁾の研究をも含めて、後のチャアダーエフ研究において出発点となったゲルシェンゾンの古典的労作³⁾と、1931年に出たケネーの詳細な研究⁴⁾とを出るものではない。しかしてチャアダーエフ自身の書いたものとはといえば、書簡をも含めて、彼が辞任を願出た1820年以前の資料は皆無である故に、多くの同時代人のメモワールの類が利用されているのであるが、これらのすべてを今日直接参照することは出来ないの、この点においてもゲルシェンゾンやケネーの研究は、現在までその価値を保持していると言える。しかしながら、チャアダーエフの思想形成をあとづけるにあたっては、判明せぬ幾多の事実があるということからも、さまざまなアプローチと解釈が可能であつて、この点ケネーによりながらも、西欧思想や時代思潮との関係においてより幅広い角度から論じたコワレの研究⁵⁾や、最近のソヴィエトのデカブリスト研究の成果を生かしつつ、チャアダーエフとデカブリストとの関係を論じたシュクリノフの先にあげた著書やフィリッポフの論文⁶⁾にも、多くの示唆を見出すことが出来よう。

1) Heinrich Falk, *Das Weltbild Peter J. Tschadaejews nach seinen acht "Philosophischen Briefen"*, München, 1954.

2) П. С. Шкуринов, П. Я. Чаадаев, М. 1960. (以下単に Шкуринов とす)

3) М. Гершензон, П. Я. Чаадаев, *Жизнь и Мышление*, СПб. 1908 (以下単に Гершензон とす)

4) Charles Quénet, *Tschaadaev et les lettres philosophiques. Contribution à l'étude du mouvement des idées en Russie*, Paris, 1931 (以下単に Quénet とす)

5) Alexandre Kouyré, *Petr Tchaadaev*, dans *Étude sur l'Histoire de la Pensée philosophique en Russie*, Paris, 1950, pp. 19-102.

6) Л. А. Филлиппов, *Религиозная утопия П. Я. Чаадаева и современные теологии*, История СССР, 1961, № 6.

以下においても、これら先学の業績を参照しつつ記述を進めることとする。

**

チャアダーエフの経歴については、今日までいぜんとして判明せぬ多くの事実があるが、そもそも彼がいつどこで生まれたかについてもはっきりしていない。⁷⁾ 生年については、1792年から1796年に至る四つの異説があり、⁸⁾ 出生地に関しても、モスクワという説とニージニ＝ノヴゴロドだとする説とがある。⁹⁾ しかし生年に関して言うならば、彼が多くのデカブリストと同じ世代に属し、オドエフスキー、ホミヤコフ、キレエフスキーらよりもほぼ十才の年長であって、これらドイツ観念論哲学にはぐくまれた「愛智会」の浪漫主義的観念論者と、主としてフランスの啓蒙思想に育てられたデカブリストの世代とを結びつける、いわば「生きたきずな」(ミリュコフ)であったことを指摘すれば足りよう。

四十年代の「父」の世代と、六十年代の「子」の世代との間に一つの明瞭な質的相異を見るようには、二十年代の政治的志向を有するインテリゲンツィアと、三十年代の思弁的傾向を持つそれとの間に一線を引くことは出来ないが、¹⁰⁾ 二十年代のデカブリストの世代にあっては、政治的志向がより優位を占めており、それが三十年代になると、思弁的傾向を持つ貴族インテリが多数を占めるように変わってきたとは言い得る。¹¹⁾ チャアダーエフについて言うならば、彼が「二十年代の子」(レルネル)として、デカブリストの多くと同じ精神的雰囲気の中に育ったこと、そして彼らの政治的志向を十分すぎる程理解していたということと、ドイツの観念論哲学、とりわけシュリング哲学の研究という面では、次の三十年代の世代に先馳けていたという事実を、ここであらかじめ認識する必要がある。

キレエフスキー兄弟が早くに父を喪った如く、チャアダーエフとその二才年長の兄ミハイールもまた幼くして父親に死別したが、彼らの場合は相ついで母親をも喪った¹²⁾ がために、孤児となった二人は母の姉たるアンナ・ミハイーロヴナ・シチュエルバートヴァの許において育てられた。チャアダーエフの母方の祖父なる人は、著名な歴史家シチュエルバートフ公で、いわば名門の家柄に属する。そしてこのような家柄に対する一種の誇りとか矜持といったものが、後年のチャアダーエフの人との交際における一見冷ややか

7) Falk, op. cit., p. 13.

8) 「スラブ研究」第6巻, 65頁, 注1

9) シュクリノフは、1794年モスクワ説をとっている。Шкуринов, стр. 4

10) これは一つには、両世代を通じて、インテリの殆どすべてが貴族出身であったということ、更に二十年代においては、「北極星」と並んで、「ムネモジーナ」が刊行されており、又三十年代においても思弁的傾向を持つスタンケーヴィッチのサークルと並んで、より政治的な志向を有するゲルツェン、オガリョフらのサークルがあったこと等による。

11) このように二十年代と三十年代のインテリの主たる傾向を二分することは、つとにイヴァノフ＝ラズムニクがおこなっているところである。Иванов-Разумник, Общественные и умственные течения 30-х годов и их отражение в литературе, История русской литературы XIX в. под ред. Овсяннико-Куликовского, Т. I, М. 1908

12) 父は1795年に、母はそれから二年して1797年に死んでいる。

哲学書簡

な態度や、サロンでの非の打ちどころのない起居振舞にもあらわれるところとなるのである。

このチャアダーエフの祖父には、「ロシアにおける風俗の頹廃について」と題する歴史論文があるが、¹³⁾ これは古来のロシアの醇風美俗が、ピョートルの改革以来地に堕ちたことを嘆いたもので、このような不満は、ロシアの形の上だけの西欧化に反対する当時の少なからぬ貴族階級が抱いていたところであった。¹⁴⁾ はたしてチャアダーエフが、この原稿を読んでいたか否かについては疑問があるが、¹⁵⁾ 後年の「哲学書簡」の主題たるロシア文明と西欧文明の関係が、この祖父によって、すでにこのような形で論ぜられていたことは興味あるところと言えよう。しかしわれわれにとってより重要なのは、カラムジーンやシチュエルバートフのある意味では単純なかかる保守的な愛国心が、アレクサンドル一世の治世の初期において自由主義思想の洗礼を受け、更に祖国戦争と外征という体験を経たチャアダーエフやデカブリストの世代において、如何なる質的变化をみたかということである。

両親を喪ったチャアダーエフ兄弟は、この伯母の家庭において養育されたのであるが、この伯母なる人は、「極めて単純な精神の人であり……その生涯が示すように、まことに善人で献身的であった」といわれている。¹⁶⁾ 事実、後年の彼女の書簡からも、この伯母がチャアダーエフ兄弟を真実の母のごとくいくつしみ育ててきたことがうかがえるのであって、¹⁷⁾ チャアダーエフの幼年時代に、悲しい孤児の境遇を認めることは出来ない。

このような伯母の庇護のもとにあつて、チャアダーエフとその兄は、当時の貴族の子弟の習慣にしたがって、多くの家庭教師について勉強を始めたのであるが、この中には、当時モスクワ大学で経済学を教えていたクリスチャン・シュレッツァーや、歴史と哲学の教授テオフィール・ブーレの如きすぐれた外人教師がいたと伝えられている。¹⁸⁾ よき個人教授というものが、教えをうける生徒の素質がすぐれている時にどれ程の効果をあげ得るものであるかは幾多の例が示すところであるが、幼い日のチャアダーエフの早熟な才能のあらわれについて、ジハレフは次のように回想している。

「未だ少年時代をすぎたばかりというのに文献を集め出して、彼はモスクワ中の古本屋に知られるようになった。またバリのディド(Didot, 出版社)とも取引関係を持ち、十四才にして、当時未知のセルゲイ・ミハイロヴィッチ・ゴリーツィン公爵に対して、何か自分の知りたいことについて手紙を書き送った。更に彼は多くの高名の士と、宗教・科学・芸術について論じたものだった。」¹⁹⁾

1808年、チャアダーエフはモスクワ大学に入学したが、当時の大学の記録は1812年

13) Quénet, p. 9

14) われわれは、かかる不満を最も雄弁に代弁したのものとして、カラムジーンの初期の著作をあげることが出来る。

15) Quénet, p. 10

16) Весник Европы, 1871, 7, стр. 175 ; См. Гершензон, стр. 4 : Quénet, p. 3

17) 1834年8月26日付, ミハイール・チャアダーエフ宛書簡

18) Русский Архив, 1866, col. 246, No. 14, col. 250 : Cf. Quénet, p. 4-5

19) Вестник Европы, 1871, 7 ; см. Гершензон, стр. 7

の戦火で焼失しているため、何学科に入学したかは不明である。²⁰⁾ しかしより重要なのは、チャアダーエフがここにおいて、後年長い友誼を結ぶこととなった、生涯の友を見出したということである。この中には、デカブリストのヤクーツキンや、ニコライ・ツルゲーネフ、ニキータ及びアルタモン・ムラヴィヨフ、作家のグリボイエドフ等がいるが、²¹⁾ 特にヤクーツキン及びツルゲーネフとの交友は多くの書簡が示すように、生涯にわたって極めて親密なものであった。

これより二年前1804年にモスクワ大学は新しい大学令によって改革され、ある程度の自治も取入れられて自由主義的な教育が施されるに至っていた。このような大学にあって、チャアダーエフが何を学んだかについては、具体的にこれを明らかにしないが、次の二点だけは明記する必要があると思われる。即ちその一は、先に記したブーレが当時この大学においてカント、フィヒテ、シェリングらの哲学をすでに紹介しており、チャアダーエフがヤクーツキンらと共に哲学的問題を論じあっていたことであり、²²⁾ 第二には、ツヴェターエフの自然法についての講義や、カチェノフスキー教授の雑誌《Вестник Европы》が、新しい思想に対する興味を若い学生に与えていたということである。²³⁾ チャアダーエフの親友ニコライ・ツルゲーネフは、その大学時代日記に、カチェノフスキーの平民と特権階級の差に関する講義に触れたあとで、「ロシアにはこのような権力の濫用があることを、心から悔まずにはいられない」²⁴⁾ と記しているが、この言葉は、当時の若いインテリが、西欧思想を学ぶことによって、現実のロシアにその目を向けはじめたことを物語っているものと言えよう。更にシュクリノフは、この頃のチャアダーエフの読書傾向として、ルソー、ヴォルテール、ディドロなどフランスの啓蒙主義者の名をあげているが、²⁵⁾ これは多くのデカブリストと同じ読書傾向を示すものであって、彼がいわば、「フランス化したコスモポリタンな世代」(コワレ)に属するものであることを意味する。後年チャアダーエフが「哲学書簡」をロシア語ではなく、フランス語で書いたという事実は、この時代の彼の受けた教育や、その読書傾向と無関係ではなく、また彼が西欧の思想を、その感受性の強い少年時代に、間接的な形ではなくて直接に摂取していたという点は重視すべきところである。²⁶⁾

ゲルツェンが、いわば生まれながらにして祖国戦争の砲火を浴び、愛国的感情の高まりを子守唄にして育ったことと比べると、それより一時代前に生まれたチャアダーエフが、すでに祖国戦争の前に、西欧文化に対する憧憬の中に知的に目覚めたという事実

20) ゲルツェンソンは多分文科であろうと推測している。Гершензон, стр. 6

21) Шкуринов, стр. 10. なおこれと時を同じくして後にセミヨノフスキー連隊事件に連坐する従兄弟のイヴァン・シチェルバートフも入学している。

22) Записки, статьи, письма декабриста И. Д. Якушкина М. 1951, стр. 627 (以下単に Якушкин, Записки とす) なおケネーによれば、このほか、法科ではラインハルトが新しいドイツ哲学を講じていた。Quénet, p. 12

23) М. В. Нечкина, Грибоедов и декабристы, М. 1947. стр. 93

24) 1808年5月7日の日記。

25) Шкуринов, стр. 9

26) チャアダーエフが「ロシア語よりもフランス語の方をよりよく話す」最後の世代に属していたということは、自らの考えをよりよく表現するためにフランス語で書くことをすすめたゲルツェンへの手紙からもうかがえよう。(1851年7月26日付書簡)

は、両者の精神的発展の上に大きな相異があったことを示しているといえよう。

かかる知的雰囲気の中にあつて、大学時代のチャアダーエフが、「その自主的な行為によって、ひととき目立っていた」²⁷⁾ とジハレフは回想しているが、ローンギノフも若き日の彼が「疲れを知らぬ読書家で、常により多く知ることに貪欲であった」²⁸⁾ と記している。しかもその美貌と、比類なく優雅な物腰、更に踊りの名手という評判は、チャアダーエフをして「モスクワ中の若者の中で最も輝かしい」²⁹⁾ 存在たらしめていたのであった。³⁰⁾

このように萬人からその輝しい未来を囑望されていた若者が、祖国戦争とその後のロシア社会の変化の中にあつて、如何に生きていったかをわれわれは以下に見るであらう。

1812年5月、チャアダーエフは学窓を出るや、その兄とともに、近衛のセミヨノフスキー連隊に入隊した。この入隊が、キルピチニコフの言うように「祖国防衛のために進んで志願した」³¹⁾ ものか、あるいはゲルシェンゾンやケネーが言っているように、「当時の貴族の子弟の慣習に従った」³²⁾ までであるかについては、チャアダーエフ自身は何も語っていない以上いずれも憶測の域を出ないが、われわれにとってより重要なのは、戦争とその後の外征においてチャアダーエフの示した態度がどのようなものであったかということである。入隊した年の八月末から九月はじめにかけて、彼は連隊旗手として有名なボロヂノの会戦に参加しているが、これにはデカブリスのベステリ、ヤクーンキン、セルゲイ・ムラヴィヨフ＝アポストル、ラエフスキー、トルベツコイといった面々も加わっている。この時後衛にあつたセミヨノフスキー連隊は、クトウゾフ將軍の命令により、ラエフスキーの大隊を援助すべく、仏軍の槍騎兵隊と白兵戦を交えたと伝えられている。³³⁾ この会戦後チャアダーエフは1813年の5月にはセミヨノフスキー連隊からアフトウルスキー驃騎兵連隊に移っているが、³⁴⁾ この後1814年のパリ入城まで、幾多の戦闘に参加し、叙勲もし昇進もしている。これらのことは、いずれもチャアダーエフが軍人として立派にその職責を果たしたことを示すものと言えよう。

しかしわれわれにとってより興味があるのは、ジハレフの伝える次の挿話である。チ

27) Вестник Европы, 1871. 7, стр. 182; См. Нечкина, Грибоедов и декабристы, стр. 83

28) Современник, 1856, LVIII, стр. 5; Cf. Quénet, p. 14

29) Quénet, p. 14

30) プーシキンはエヴゲエニイ・オネーギンの第1篇25節で次のように書いている。

Второй Чаадаев, мой Евгений, В своей одежде был педант
Воясь ревнивых осуждений, И то, что мы назвали Франт.

31) Русская Мысль, 1896, № 4, стр. 143, См. Гершензон, стр. 8

32) Гершензон, там же; Quénet, p. 16

33) П. Дирин, История лейб-гвардии семеновского полка, Т. I., стр. 397; См. М. В. Нечкина, Движение декабристов, Т. I. стр. 109

34) マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルはこの時の転任をチャアダーエフが驃騎兵連隊の制服にひかれたからであるとしているが、これはチャアダーエフのフロントぶりを示す一つの挿話にすぎず、事実とは思われない。

А. Сазонович, Из записок декабриста М. И. Муравьева-Апостола, Голос Минувшего, 1914. № 1, стр. 140 (以下単に Из записок М. И. Муравьева-Апостола とす)

チャアダーエフは1813年の春にシレジアのラング・ブラウ村に暫く駐屯していたが、この滞在は彼にのちのちまで忘れ兼ねる「大きな」印象を与えたものであった。

「ここにおいて——とジハレフは書いている——はじめてヨーロッパの生活がこの上なく魅力ある形のもとに、彼をとらえたのであった。チャアダーエフは死ぬまでこのラング・ブラウ村について情熱をこめて語っていた。このような情熱は、ロシアの農村とシレジアやハンガリアの村とのちがいを知る者にとっては、誰でも理解出来るところである。」³⁵⁾ ロシアの貧しい農村と、ヨーロッパの秩序立った豊かな村落との間のきわ立った相異は、その後30余年して1847年にゲルツェンがロシアを去った時にも深い印象をその心に焼付けずにはおこななかったところのものである。ゲルツェンはその著「ロシアにおける革命思想の発達について」の序文においてこの時の印象を記しているが、彼がこのことをもってヨーロッパとロシアの歴史的相異を論ずる一つのいとぐちとしているのは、「哲学書簡」の主題とあわせ考える時に、このシレジアの農村の滞在がチャアダーエフの精神的成長にとって、一つの大きな意味を持ったにちがいないことを暗示している。

祖国戦争は若いロシアのインテリにとって、新しい世界をその現実の姿の下に見せたところの貴重な体験となったが、この点についてチャアダーエフと行動をとともにしたヤクーンキンは次のようにその回想記に記している。「まる一年ドイツにいて、その後数カ月パリに滞在したことは、多少なりともロシアの若者の考え方をさえさせずにはおこななかった。このような偉大な環境の中にわれわれの一人一人が多少とも成長していったのである。」³⁵⁾

問題はこのような若者の一人一人が、おのれの得た新鮮な外国生活の印象を、どのように各自の思想の中に位置づけ、そこから如何なる結論をひき出したかにある。そしてこのような作業が、祖国戦争の後において、チャアダーエフにおいてもデカブリストにおいても残された課題となったのであるが、それではチャアダーエフがどのような気持で、この外征を体験したかを更に考察することとしよう。

ヤクーンキンらと同様、チャアダーエフもまた1814年にパリに入城したが、この時の思い出を後に彼はその手紙³⁶⁾の中で次のように回顧している。

「われわれはヨーロッパに対して敬意をもっていましたし、尊敬すら抱いて眺めてきました。なぜならばわれわれは、ヨーロッパこそが自分たちに多くのことを、とりわけわれわれ自身の歴史を教えてくれたことを知っていたからです。たまたまわれわれがピョートル大帝のように勝利を得たときに言ったことは、皆様方、この勝利こそあなたごたのお蔭なのですという言葉でした。われわれが、とある一日パリに入った時の状態はこんな風でしたし、自分自身所詮青二歳の成り上がりものであることを忘れていたわれ

35) Вестник Европы, 1871. 7, стр. 186

35) Записки Якушкина, стр. 8

36) Сочинения и Письма П. Я. Чаадаева, Т. I, стр. 308 (以下単に С. и. П. とす) この手紙は“無名氏より無名氏”へとなっているが、これがチャアダーエフ自身の書簡であることはその筆蹟からも明らかであり、С. и. П. 第二巻冒頭の写真版は、この手紙を転載したものである。なおこの点に関しては Гершензон, стр. 191-192 参照

われの、そこでの受け入れられ方というのも、こんなものだったのでした……」ここにわれわれは、当時のロシアの一人のエリートにおける複雑な感情の屈折を見ることができ、すなわち、戦争における勝利者、ヨーロッパの都パリを陥入れた者としてのひそかな誇りと、にもかかわらず冷静に考えれば所詮自分たちがヨーロッパの《jeunes parvenus》にすぎないという自己卑下の二重のコンプレックスがこれである。チャアダーエフの世代にとっては、祖父たちの世代がその無智から古きよきロシアを無条件に讃えたようには、単純に古きよき時代を讃美することはできなかつた。教育が、歴史が彼らにそれを許さなかつたからである。祖父の世代にあったところの愛国心が欠如していたわけでは決してない。パトリオティズムの質がすでに変化していたからである。そしてこのようなパトリオティズムの質的变化、つまりその底にある「誇り」と「自己卑下」の二重の感情を正しく理解することなしには、後のチャアダーエフの思想形成も、更にはスラヴ主義者と西欧主義者との間の論争も、所詮正しく理解できないことになるのである。

われわれは先にこの外征に参加したロシアの若者が、その外国での印象からどのような結論をひき出したかが問題であるといったが、現象的には次の二つの傾向をそこに見出すことができよう。すなわち、その一はエス・ムラヴィヨフ＝アポストル³⁷⁾やエヌ・ベストゥージェフ³⁸⁾ら多くのデカブリストにみられる、ヨーロッパ政治の現実に対する開眼と、それに由来するロシアの政治的西欧化の志向であり、いま一つは、辞任以後のチャアダーエフにおいてみられるが如き、「ロシアの未来」が如何にあるべきかという問題意識から、ヨーロッパ文明の本質と歴史とを究明し、そこからロシアの文明と歴史の本質を主体的に自らの問題として取組まんとする思弁的志向である。しかしこれは現象面における二つの志向の存在を物語るだけで、その根底には両者を通じて、ひとしく祖国ロシアの立ちおくれに対する、いわば一種の危機意識にも近い切迫した感情があったことも忘れてはならない。われわれはこのことを、以下のチャアダーエフにおけるフリーメイソンや、デカブリストの秘密結社との関係にも、さらに詩人プーシキンとの交遊の中にもみるであろう。今ここではチャアダーエフもまた「十二年の雷雨」に打たれた、「十二年の子供たち」(エム・ムラヴィヨフ＝アポストル)の一人であったことを確認すればよいのである。

37) エス・ムラヴィヨフ＝アポストルは、後年審問委員会において、次の如く証言している。「ナポレオンのくびきからヨーロッパを救った三年間の戦争、そしてその結果として幾つかの国に代議制が施行されたこと、又この時代に出版され、若い者に貪り読まれた政治の書物、時代の精神、そして最後に諸国の国内法の観察、これらがロシアにおける革命思想の源泉であります。」Избранные социально-политические и философские произведения декабристов, Т. II, М. 1951, стр. 198

38) エヌ・ベストゥージェフも同じ審問委員会において、次の如く供述している。「立憲政治が施行された1815年当時五ヶ月間オランダに滞在しましたことは、私にはじめて民法や公民権の利益についての理解を与えてくれました。その後二度ほど短期間フランスを訪れ、又イギリスやスペインを旅行しましたことは、この様な考え方をより強固にすることになったのです。」Там же, Т. I, стр. 436
尚チャアダーエフの親友エヌ・ツルゲーネフも、「Мысли о составлении общества…」の中で次のように記している。「1812年、13、14、15年の出来ごとは、われわれをヨーロッパに近付けました。われわれ、少なくともわれわれの多くの者は、諸国民の生存の目的、国家存在の目的を見たのでした。そして、如何なる人為的な力も、もはやわれわれをあと戻りさせることは出来なかつたのです。」Там же, Т. I, стр. 222

勝利の栄光を担って祖国に帰還した若きロシアのインテリがそこに見出したものは、強暴な専制政治とおくれた農奴制の明らかな弊害であった。官吏は収賄と官金の横領をほしいままにし、インフレと増税に抑圧された大衆は無言の中にじっとこらえていた。ひそかな不満の声が至るところに聞かれるようになり、その初期の進歩的施策の故に若い自由主義者たちに期待されていたアレクサンドル一世も、「全ヨーロッパの皇帝」(ヤクーツキン)となるにおよんで、「外敵は退けられた、今や内なる敵を滅ぼさん」³⁹⁾という言葉が端的に示すように、今やその期待は全く失なわれたかにみえるに至った。⁴⁰⁾このような状態をデカブリスト、アレクサンドル・ベスドゥージェフは次のように記している。

「一言で申しますならば、至るところ不満な顔がみられました。人々は街頭で肩を窄めて吹き交します。《これでは行末どうなることやら》と、あらゆる要素が醗酵状態にありました。ひとり政府のみが火山の上ののうのと悪夢を貪っていたのです……収賄はかつてないほど恥知らずにおこなわれていました……要するに、国庫においても裁判所においても役所においても、知事も総督も、利益の絡まるところはどこでも、できるものはこれをかすめ、できないものは盗んでいたのです。正直者は至るところで苦しみ、ひとりざん言者や詐欺師の輩が喜んでいたのでした。」⁴¹⁾

1816年ロシアに帰還したチャアダーエフがみた祖国の現実の姿はこのようなものだったのであり、それはまた多くの未来のデカブリストの見出した光景でもあった。かかるロシアのもろもろの矛盾に対し、彼よりも一足先に帰還した後のデカブリスト、オルロフ将軍らは、外征中にみたドイツのトゥーゲントブント(Tugendbund)にならって、社会の改造と公共の福祉を目的としたフリーメイソンの結社を結成したが、⁴²⁾ ヤクーツキンもまたセミヨノフスキー連隊内にアルテリを作って、友人たちと外国の雑誌を読みあつたり、ロシア国内の農奴制や兵役の矛盾について論じあつていと伝えられている。⁴³⁾ 西欧にくらべて明らかに立ちおけている祖国を、如何に改革せんかという問題こそ、彼らにとって唯一の、そして共通の問題だったのである。1816年にデカブリストの最初の秘密結社「救済同盟」が創設されるまでは、これらロシアの若きインテリにとってフリーメイソンの結社こそが、ほとんど唯一のその政治的、社会改革的アスピレーションのはけ口であったといえることができる。そして事実また、デカブリスト、トルベツコイが記しているように、このようなフリーメイソンのロッジは当時数多く存在していた

39) この言葉はデカブリスト、ミハイル・オルロフの「秘密結社に関する覚書」の中に記されている。Избранные…произведения декабристов, Т. II, стр. 309

40) 1814年海路フランスから帰国したヤクーツキンは、首都における近衛のパレードを参観したが、この時自らの馬の前を横切った百姓を、アレクサンドル一世が抜刀して追いかけたのを目撃してその回想記に次のように記している。「…われわれは自分の目を信ずることが出来なかった。そしてこのようなツァーリを今迄愛してきたことに恥づかしくなって脇を向いてしまった。これが私のツァーリに対する最初の幻滅であった。」Записки Якушкина, стр. 9. このようなツァーリに対する一般的失望は、後のチャアダーエフの辞任と必ずしも無縁ではないように思われる。

41) Избранные…произведения декабристов, Т. I, стр. 495-496

42) Нечкина, Движение декабристов, Т. I, стр. 132-139

43) Записки Якушкина, стр. 11

が、⁴⁴⁾ ペテルブルグに帰ったチャアダーエフもまた、ここにおいて *les Amis réunis* という名のロッジに加入し、かなり積極的に活躍したといわれている。⁴⁵⁾ このチャアダーエフの加入したロッジには大学時代の友人グリボイエドフや、デカブリストのペステリも入っていたと伝えられるが、これはロシアとポーランドの貴族をメンバーとする、どちらかといえば、「とくに貴族的な」ロッジであったといわれている。⁴⁶⁾ ケネーによれば、当時のロシアにおけるフリーメイソンのロッジは、神秘主義的傾向のものと、ドイツ流の流れを汲んだ合理主義的、人道主義的な傾向のものとの二つに大別されるが、チャアダーエフが加入したこの *les Amis réunis* はどちらかといえば前者に属するものであったとされる。⁴⁷⁾ しかしながら、デカブリストの中でも、もっともラジカルであったペステリもこのロッジに加入していたことを考える時、チャアダーエフがかかる傾向を有するフリーメイソンのメンバーであったことをもって、当時彼がすでに神秘主義的思想を抱いていたと早急に結論することはつつしまねばなるまい。しかも、彼がこの *les Amis réunis* に加入していたのは、時期的にもそれほど長いものでなく、ペステリの出たあと間もなくしてチャアダーエフもまた退会している⁴⁸⁾ のをあわせ考えるならば、このロッジのチャアダーエフに与えた影響をそれほど大きいものとも考えることもできない。しかしより重要なのは、戦争から帰ったチャアダーエフが、このような当時の進歩的なインテリの風潮に決して無縁だったのではないということであり、またこの時の彼がロシアの現実に少なくとも満足してはいなかったということである。そしてこのことはこのころから始った彼の若きプーシキンとの交遊においても認められるところであった。

1817年の暮に、アレクサンドル一世の侍従武官であったヴァシリチコフ將軍の副官に任ぜられたチャアダーエフは、1819年の2月には二等大尉に、12月には一等大尉に昇進しているが、このような彼の「目ざましい成功ぶり」は、その「家柄、知性、美貌、服装、蔵書」とともにチャアダーエフをして、「ペテルブルグのすべての若者の中でも、比類なく目立つ、注目の的たる輝しい存在」⁴⁹⁾ たらしめたのであった。このヴァシリチコフ將軍の副官という地位は、近衛の中でももっとも輝しい前途を保障するものであって、アレクサンドル皇帝も将来チャアダーエフを自らの副官に取り立てんとのおぼしめしがあるとの噂がペテルブルグの社交界に流れていた。⁵⁰⁾ しかしこのことをもってチャアダーエフが心から満足していたのではないことは、この当時作られた「チャアダーエ

44) См. Нечкина, там же, стр. 106

45) Вестник Европы, 1871, 7. стр. 190; Cf. Quénet, p. 53. なおシュククノフは、チャアダーエフがこれより前、1814年にクラコウにおいてすでにフリーメイソンの一結社に加入していた事実もあげている。Шкуринов, стр. 11

46) Quénet, p. 53

47) Quénet, pp. 53-54

48) 1826年のプレスト・リトフスクにおける取調べにあたって、チャアダーエフは退会の理由を、このロッジが「誠実にして思慮深い人を満足させるような力強いものを何一つ含んでいなかったから」であると述べている。С. и П., Т. I, стр. 71

49) Записки Д. М. Свербеева, II, стр. 386; Cf. Quénet, p. 21

50) Гершензон, стр. 9-10

フの肖像に」と題するプーシキンの次の詩が雄弁に物語っている。

Он вышней волею небес
 Рожден в оковах службы царской:
 Он в Риме был бы Брут, в Афинах Периклес,
 А здесь он --- офицер гусарский.

この詩を作った当時プーシキンはまだリツェイに在学中であったが、二人が初めて知り合ったのは1816年の秋、カラムジーンの家においてであったといわれている。⁵¹⁾ そしてこの時以後二人の関係は、1820年にプーシキンが政治的諷刺詩「皇帝たちへの教訓」によってペテルブルグを追われるまで、急速に親密の度を加えていった。⁵²⁾ しかしながら、この両者の関係においては、チャアダーエフの方が年齢も上であり、学問も教育もあつたところから、プーシキンにとってチャアダーエフはよき友であると同時によき指導者でもあつたと考えられる。そしてこのような若きプーシキンに対するチャアダーエフの指導者としての役割は、チャアダーエフ自身も、⁵³⁾ プーシキンも⁵⁴⁾ 双方がともに認めているところである。しからば如何なる点においてチャアダーエフが若き日のプーシキンを知的に啓発したのか、両者を互いにひきつけた共通の問題が何であつたかということが明らかにされねばならないが、これを示すものとしてわれわれは、1818年に書かれたプーシキンのポスラーニエ、「チャアダーエフへ」と、その後一年して書かれた有名な詩「村」をあげることができよう。

詩「チャアダーエフへ」の末尾で詩人は次の如く歌っている。

Пока свободою горим,
 Пока сердца для чести живы,
 Мой друг, отчизне посвятим

51) Шкуринов, стр. 12

52) チャアダーエフとプーシキンの関係については、Гершензон, «Чаадаев и Пушкин», Статьи о Пушкине, М. 1926, стр. 31-41 参照

53) С. и П., Т. I, стр. 306. 1854年 С. П. Шевырев 宛書簡

54) 1821年, 南ロシアに追放中であつた詩人は, “チャアダーエフに” 次の詩を捧げている。

Ты был целителем моих душевных сил;
 О неизменный друг, тебе я посвятил
 И краткий век, уже испытанный судьбою,
 И чувства, может быть спасенные тобою!
 Ты сердце знал мое в цвете юных дней;
 Ты видел, как потом в волнении страстей
 Я тайно изнывал, страдалец утомленный;
 В минуту гибели над бездной потаенной
 Ты поддержал меня недремляющей рукой;
 Ты другу заменил надежду и покой;
 Во глубину души вникая строгим взором,
 Ты оживлял ее советом иль уроком;

Души прекрасные порывы!
Товарищ, верь: взойдет она,
Звезда пленительного счастья,
Россия вспрянет ото сна,
И на обломках самовластья
Напишут наши имна!

プーシキンはチャアダーエフに対して、「祖国」にその魂を捧げ、「専制政治の廃墟の上」に自分たち二人の名の書かれるのを信じるようにと呼びかけているが、これは当時の二人の共通の話題と志向が奈辺にあったかを明示しているといえよう。そしてこのような志向は、詩「村」において一層はっきりと認められるところであるが、しからば何故にこの詩がプーシキンとチャアダーエフを結びつけるかという点に関しては一言説明の必要があろう。前者がその標題の如く、明らかに「チャアダーエフへ」あてられたものであるのに対し、この詩にはチャアダーエフの名すら出て来ないからである。

プーシキンの詩才は早くから多くの人の噂にのぼるところであったが、皇帝アレクサンドル一世もこのことを聞いて、待従武官ヴァシリチコフにプーシキンの詩を見せるように命じた。自分の副官であるチャアダーエフが詩人と親交のあるのをすでに知っていたヴァシリチコフは、今度はチャアダーエフに命じて一篇の詩を書き写させて皇帝に提示したが、それがこの詩「村」だったのである。もっともこれが果してチャアダーエフの選んだものか、あるいはプーシキン自らが選択したものかについては異論があるが⁵⁵⁾いずれにもせよこの「詩」が二人にとって因縁浅からぬものであり、またひとしく二人を結びつける何ものかを持っていたことだけは確かであろう。しかしてそれが果して何であるかは、次の詩句が明瞭に物語っている。

Здесь барство дикое, без чувства, без закона,
Присвоило себе насильственной лозой,
И труд, и собственность, и время земледельца.
Склонясь на чуждый плуг, покорствуя бичам,
Здесь рабство тощее влачитья по браздам
Неумолимого владельца.
Здесь тягостный ярем до гроба все влекут,
Надежд и склонностей душе питать не смея,
Здесь девы юные цветут
Для прихоти бесчувственной злодея.
Опора милая стареющих отцов,
Младые сыновья, товарищи трудов,
Из хнжины родной идут собой умножить

55) Quénet, p. 49

Дворовые толпы измученных рабов.
 О, если б голос мой умел сердца тревожить !
 Почто в груди моей горит бесплодный жар
 И не дан мне судьбой витийства грозный дар ?
 Увижу ль, о друзья ! народ неугнетенный
 И рабство, падшее по манию царя,
 И над отечеством свободы просвещенной
 Взойдет ли наконец прекрасная заря ?

果してチャアダーエフがプーシキンに対し、あの豊かで整然としたヤング・ブラウの村の思出を語ったか否かについては誰にもわからぬ。しかしこのようなしいたげられた農民に対する同情は、チャアダーエフの友人であるヤクーンシキンにも、⁵⁶⁾ ニコライ・ツルゲーネフ⁵⁷⁾にも共通してみられるところであることから考えてみても、このころのチャアダーエフがその新鮮な外国の農村の印象と比較して、あまりにもみじめなロシアの農村の姿に心を動かさずにおこななかったことは想像に難くないし、これらのことについてプーシキンと語りあったことも十分に考えられるのである。そしてかかる《思いやりも法もない兇暴な農奴制》のくびきの下に苦しむ農民に対する同情こそ、デカブリストの結社創設の一つの契機となったのであった。

1816年に六人の近衛の士官によって、デカブリストの最初の結社「救済同盟」が設立されたが、創設者の一人たるヤクーンシキンは、その結社の目的が「広い意味でのロシアの福祉にあった」と述べている。⁵⁸⁾ ヤクーンシキンを含めて、この六人の創設メンバーの中、アレクサンドル・ムラヴィヨフを除いた五人まではいずれもチャアダーエフの親しい友人であったが、⁵⁹⁾ 彼らのすべてが、チャアダーエフと同様に祖国戦争に参加し、ヨーロッパの社会をその目で眺めた上で、帰国後の祖国の現実に多くの矛盾を見出していたのであった。後にペステリは審問委員会の供述の際に、この結社が農奴制の廃棄と立憲君主制の導入を目的としていたと述べているが、⁶⁰⁾ チャアダーエフも1826年の取調べに当って、「彼らの考え方と政治的自由思想とを知っていた」⁶¹⁾と供述しているところから考えて、この結社の内容については友人たちから聞いていたことが推測されるのである。しかしこの「救済同盟」は、そのメンバーの数も30人内外の小規模なもので、⁶²⁾ チャアダーエフはこれには加入していない。そしてその後1818年になって、この「救済

56) Записки, стр. 26-27, および стр. 374-377 (チャアダーエフ宛書簡)

57) Н. И. Тургенев, «О крестьянах» (1818), Избранные произведения декабристов, Т. I, стр. 215-220

58) Записки, стр. 11

59) Там же, стр. 10. チャアダーエフの友人五人とは、ヤクーンシキン、ニキータ・ムラヴィヨフ、マトヴェイ及びセルゲイ・ムラヴィヨフ＝アポストル、トルベツコイを指す。

60) Избранные произведения декабристов, Т. II, стр. 163

61) С. и П., Т. I, стр. 69

62) Нечкина, Движение декабристов, Т. I, стр. 170

同盟」は、より大規模な半ば公然化した「福祉同盟」に改組されるのであるが、問題は果してチャアダーエフがこの結社に加入していたか否かにある。シュクリノフの最近の著書によれば、チャアダーエフは1820年から翌21年にかけて、この結社に加入し、さらにその解散後は「北方結社」に入ってアクチーフなメンバーとして活躍したといわれる。⁶³⁾ この点に関してはフィリップフも同様にデカブリストのブルツォフや、トルベツコイ、オボレンスキー、ニキータ・ムラヴィヨフらの証言から、チャアダーエフが「福祉同盟」に加っていたことを明言している。⁶⁴⁾ しかし、この問題については少なくとも二つの異論がある。すなわちその一つは、1826年のブレスト・リトフスクの取調べにおけるチャアダーエフ自身の供述であり、他の一つは、友人マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの回想記である。前者においてチャアダーエフは、「如何なる秘密結社にも属したことがなかった。」⁶⁵⁾と断言しており、また後者においても、「チャアダーエフはわれわれの結社に加入していなかったし、また加入することもできなかった」⁶⁶⁾と記されているからである。よしんばチャアダーエフ自身の供述が身の保全をはかるための虚偽の申立であるにせよ、親友たるムラヴィヨフ＝アポストルの記述はどのように解すればよいか？さらにこの「福祉同盟」には200人以上のメンバーがいたことを考えるならば、⁶⁷⁾先のブルツォフや、トルベツコイらの供述もその信憑性については問題なしとせぬ。以上二つの相異なる供述からこの問題を検討するとき、われわれは当時のチャアダーエフの一身上に起った大きな変化についてまず検討せねばならないように思われる。シュクリノフやフィリップフのいう1820年という年は、チャアダーエフの生涯において一時期を画す辞任を決心するに至った年であり、さらにこの年の末には「福祉同盟」の解散がすでに問題となっていたからでもある。したがって以下において、このあわただしい1820年におけるチャアダーエフの一身上に起った事件をまず見てみることにする。

1820年10月、首都ペテルブルグにおいて近衛のセミヨノフスキー連隊の暴動が起った。この連隊は先に記した如く、かつてチャアダーエフが勤務していた連隊であり、祖国戦争に際しては、幾多の武勲を立て聖ゲオルク旗を皇帝より下賜されたいわばアレクサンドル一世にとっては股肱の部隊であった。祖国戦争は多くの貴族階級出身の士官にとって、民衆出の兵に対する認識をあらためさす一つの機会ともなったが、戦後においてもこの連隊では士官と兵の間に他に見られぬ人間的な関係が続いていたといわれる。それが1820年になって、アラクチェーフのおぼえめでたいシュヴァルツなる連隊長が赴任するにおよんで、従来の際の慣行に反した苛酷な軍律と刑罰がおこなわれるようになった。⁶⁸⁾かかる取り扱いに堪えかねた兵たちは、10月16日の夜自らすすんで連隊長に対する告発状を上官に提出したが、このような近衛の兵による集団抗議というも

63) Шкуринов, стр. 16

64) Филлиппов, 前掲論文 186 頁

65) С. и П., стр. 72, Литературное наследство, Т. 19-21, стр. 24

66) Из записок М. И. Муравьева-Апостола, стр. 140

67) Нечкина, Движение декабристов. Т. I, стр. 222; Якушкин, Записки, стр. 24, 29

68) Нечкина, Движение декабристов, Т. I, стр. 308-309

のはかつてなかっただけに、統帥部は大いに慌て、かつ皇帝アレクサンドル一世が神聖同盟の会議でトロップパウ (Troppau) に行っていて不在だっただけにその処置に窮した。そこでチャアダーエフの上官たりし待従武官ヴァシリチコフ将軍は一計を案じ、兵の陳情を聴くといつわってこれを逮捕し、一まず彼らをペテロ＝パヴロフスキー要塞監獄に収容し、部隊を解散して下士官・兵をフィンランド各地の要塞に投じた。⁶⁹⁾ この事件によって後日士官の四人が秘密結社の陰謀の嫌疑により裁判に付されるにいたったが、チャアダーエフの従兄弟で幼い時からの馴染であったイヴァン・シチュルバートフも捕えられて一旦は死刑を宣せられ、後減刑されてコーカサスへ一兵卒として追放される破目となった。⁷⁰⁾ 多くの史家の認めるように、この事件はいわば自然発生的なものであって、その背後に秘密結社の存在を見ることはできないが、お膝元の首都にあって、しかも皇帝の股肱の近衛連隊が暴動を起した事実は、当時の支配階級を動揺させるに十分であったし、また後にデカブリストの蜂起に一つの先例を開いたという点でもこれは重要な事件だったのである。

しかしてこの事件のアレクサンドル皇帝に対する報告は、チャアダーエフに委ねられるところとなった。すなわち彼は首都を発してトロップパウにおもむき、皇帝に謁見して事件の報告をなしたが、この時の模様を後にチャアダーエフから直接聞いたマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルは回想して、皇帝がこの時すでに密使から先に情報を得ていたメッテルニヒより事件について聞いていたため、いたく機嫌をそこねていたと記している。⁷¹⁾ しかしこの点については異論があり、メッテルニヒ自身のメモワールにもとづいてローンギノフが反証を挙げているが、⁷²⁾ いずれにせよ、このトロップパウ行きから首都に戻ったチャアダーエフが、突如その辞表を提出したことは、彼の将来の出世が保証されていただけに、ペテルブルグの社交界にさまざまな臆測を生ませることとなった。ある者は単純にチャアダーエフがその伊達者ぶりから服装などにこって報告がおくれたため皇帝の機嫌をそこねた故であるとし、⁷³⁾ 他の者はもつとうがった見方をして、チャアダーエフが以前自分の属していた連隊の不詳事を報告したことに自己嫌悪を感じたからであるとした。このことは事件の首謀者の一人としてチャアダーエフ自身の従兄弟が逮捕されていることを考えあわせると一応納得できる説明と思われるが、当時セミヨノフスキー連隊にいたマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルが、当時「われわれの誰一人チャアダーエフが報告を持って行くことに不平を言おうと思わなかった」と述べているところからみて、必ずしも辞任の理由として十分ではないように感じられる。ムラヴィヨフ＝アポストル自身は、チャアダーエフの辞任について、この時皇帝がチャアダーエフに対して彼の滞在せるメンシコフ公爵にこの事件について口止めしたことから、皇帝がその参謀総長すら疑っていることにチャアダーエフは嫌気がさして、かかる皇帝

69) Из записок М. И. Муравьева-Апостола, стр. 137-139

70) Якушкин, Записки, стр. 49

71) Из записок М. И. Муравьева-Апостола, стр. 139

72) Cf. Quénet, p. 62

73) この点については、どんなに急いでもこれ以上早く到着することは出来なかったという。マトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルの反論がある。Там же, стр. 139

の下で働く気がなくなったためであると説明している。⁷⁴⁾ しかしこの辞任の真の理由については、上官たるヴァシリチコフへの面当というチャアダーエフ自身の言葉⁷⁵⁾をも含めて、いずれも人を完全に納得させ得るものではないように思われる。ただ言い得ることは当時このような辞任の空気が少なからぬ近衛の将校の間にあったということと、⁷⁶⁾ チャアダーエフ自身も前からそのような気持を抱いていたということである。そしてこのことを端的に示すものとしては、事件の一年ほど前に兄ミハイールにあてたチャアダーエフの二通の書簡がある。これは兄の近衛退職を知らせた手紙に対する返事であるが、この中でチャアダーエフは兄の辞任が自分にとって「如何に大きな喜びであるか」⁷⁷⁾と述べ、「自分もできるだけ早く同じ境遇に入ることを望んでいる」⁷⁸⁾と記している。このような彼の気持を考慮に入れるなら、チャアダーエフの辞任の問題は、形の上でこそ突然であったが、すでに前々から考慮されていたものであったことがわかるのである。しかし問題は依然として残る。つまりこのような気持を持ち続けながらも、「(辞任を)願ひ出る権利がない時に、どうして要求を持ち出すことができましようか」と兄あての書簡でチャアダーエフ自身述べているように、彼が退職するという事は権利ではなく皇帝の「恩情による」⁷⁹⁾以外にはなかったものであり、多くの障害を覚悟しながらも、⁸⁰⁾敢えて辞職を決行したということが終局的には何に帰せられるかという疑問である。そしてこの点をはっきりさせるためには、当時のチャアダーエフの心理状態にまで立ち入って考えてみる必要がある。というのも、かかる心理的解明こそ、チャアダーエフの辞任と、デカブリストの結社との不即不離の関係とを真に説明し得るように思われるからである。

この兄にあてた同じ書簡の中で、チャアダーエフは最新のニュースとしてスペインにおける革命について言及し、これが流血の惨事を見ることなく遂行されたことによって「一つの国民が救われた」と書き、更に「このことの中にはわれわれにもっと身近に関わることがあります。それを申しましようか……いや黙っていた方がよいようです。」⁸¹⁾と暗示的に記しているのである。これは明らかに当時の彼の政治的関心を示すものであり、このスペインの革命の成功がデカブリストにとっても、一つの大きな参考となっていたこと⁸²⁾をあわせ考えるならば、チャアダーエフが彼らと同じ精神的雰囲気の中にいたことを物語るものでもある。しかし他方において、チャアダーエフがこの当時伯母に

74) Там же

75) С. и П., Т. I, стр. 4 (1821年1月2日付伯母への手紙)

76) 外征から帰ったヤクーンキンは、アラクチャーエフ体制下のロシアの現実に対する不満と、皇帝アレクサンドルに対する幻滅から、「近衛に勤務することが堪え難いものになった」と回想している。Якушкин, Записки, стр. 10

77) С. и П., Т. I, стр. 1.

78) Там же, стр. 2-3

79) Там же, стр. 3

80) 事実チャアダーエフの辞任に当っては、アレクサンドル皇帝が彼をその副官に取立てんとのおぼしめしがあっただけに、(С. и П., стр. 4) 必ずしもスムーズには行かなかった。

81) С. и П., стр. 2

82) Избранные произведения декабристов, Т. I, стр. 208-209 ニコライ・ツルゲーネフの日記(1820年3月2日); Там же, Т. II, стр. 166-167 ペステリの供述; Восстание Декабристов, Т. XI, стр. 37 ポジオの供述

宛てた書簡の中で、退職したらスイスに行って彼の地で「永住したい」と言い、「私には一つならずの理由からロシアに留まることはできません」⁸³⁾と書いている事実は、その政治的関心にも拘らず、彼がその心の中に立身出世とか政治的活動といったわずらわしさを一切避けて、⁸⁴⁾ 孤独の世界において思索せんことを望んでいたことをはっきりと物語っている。⁸⁵⁾

一方では農奴制と専制の下にあるロシアの現実に対する改革の志向を抱きながら、他方では、あらゆる俗界のわずらわしさを避けてロシアを去って静かに思索の生活を送りたいという二重の欲求のジレンマの中に当時のチャアダーエフがあったという事実こそおそらく彼の辞任の真の動機を説明し得るものであるといえよう。

デカブリストのヤクーンキンが、1821年の初頭にチャアダーエフに結社の加入をすすめたのは、以上見てきたような心理的葛藤のさなかにおいてであった。この時チャアダーエフはヤクーンキンに対し、もっと早く加入をすすめられていたら自分は辞職などせず、ヴァシリチコフ將軍の副官としてとどまっていたのにと悔んだと伝えられている。⁸⁶⁾ 將軍の副官からさらにニコライ大公の副官となれば、大公は自らの利益のために結社を利用せんと望むかも知れず、その時には自分も結社のために働き得たかも知れないとの謂である。しかし賽はすでに投ぜられていた。今やチャアダーエフは軍職を退き、しずかに自己自身の今後の生き方を考えんとこのぞみを持つような心境にいたっていた。しかもセミヨノフスキー事件に従兄弟が連坐して以来、そしてとくにこの辞任後はチャアダーエフに対する秘密警察の目が光り出し、私信の検閲や家宅捜査も行なわれるにおよんで、⁸⁷⁾ その身の危険を感じ出した彼は、次第にそのラジカルな友人たちの秘密結社から遠のいていったと思われる。他方デカブリスト運動においても、ヤクーンキンが加入をすすめたこの1821年の初頭は、「福祉同盟」が解散して「北方結社」と「南方結社」に分かれた一つの転換期に当るのであるが、とすれば、チャアダーエフがそれ以前の「福祉同盟」に加入していたというシュクリノフやフィリップポフの主張も、ごく限られた一時期以外には妥当しないことになる。そしてさらにチャアダーエフが「北方結社」に加入していたかどうかという点になると、シュクリノフ自身も認めるように、⁸⁸⁾ これ

83) С. и П., Т. I, стр. 4 (1821年1月2日付)

84) この手紙の中でチャアダーエフは、自分が皇帝の副官となる栄光を捨てたことを、あれこれ人が取り沙汰することに「侮蔑」を表明している。

85) われわれは先に引用したプーシキンの「村」の前の部分の一節を、このような気持を示すものとして読むことも出来よう。

Я здесь, от суетных окох освобожденный,
Учуся в истине блаженство находить,
Свободною душой закон боготворить,
Роптанью не внимать толпы непросвещенной,
Участьем отвечать застенчивой мольбе,
И не завидовать судьбе
Злодея или глупца в величии неправом.

86) Якушкин, Записки, стр. 46

87) Филиппов, 前掲論文, 188頁

88) Шкуринов, стр. 15

哲学書簡

を証明する資料がない以上多分に疑わしいといわざるを得ない。事實は、おそらくヤクシーキンが結社加入をすすめた際に、チャアダーエフは以上見て来たような心理的葛藤と当局の監視に対する懸念から、はっきり加入にふみ切ることができないでいる中に、「福祉同盟」が「北方結社」と「南方結社」に分解するという事件が起ったと思われる。そしてこれ以後チャアダーエフは、その主たる関心の対象をより思弁的な問題へと向けることとなるのである。

辞任という生活の外面上の転回は、チャアダーエフの心理の内面における変化のあらわれにほかならなかった。しかしながら、このような転回に際してもその回転の軸だけは決して変らなかつたことを付け加えねばならない。そのような回転の軸とは何か？ それこそ以上見てきたような、祖国「ロシアの未来は如何にあるべきか？」という問題、これにほかならないのである。

これ以後 1825 年のデカブリストの蜂起をはさんで、「哲学書簡」の執筆にいたる前後九年の歳月は、チャアダーエフにおいてもつぱらこの問題の哲学的解明のために捧げられたのであった。そして「哲学書簡」に結実するその思想的発展が如何なるものであったかをわれわれは今後追ってゆくであろう。

**
*

第二書簡以下第五書簡までの訳出にあたっては、前にも述べた如く、⁸⁹⁾ 1928 年にシャホフスコイによって発見され、1935 年に《Литературное наследство》の第 22—24 巻に収められたシャホフスコイのロシア語訳を底本としたが、同時にファルクのドイツ語訳⁹⁰⁾をも参照した。オリジナルなテキストがフランス語で書かれているにも拘らず現状においてこれを入手することができない以上、かかる方法によらざるを得ないのは前に述べた通りである。⁹¹⁾

下欄の注は (Ш.) とあるのはシャホフスコイの注であり、(F.) とあるのはファルクのそれである。

89) 「スラブ研究」, 第 6 号, 70 頁

90) Falk, pp. 86-123

91) 「スラブ研究」, 第 6 号, 70 頁

哲 学 書 簡

《第 二 書 簡》¹⁾

もし私がさきごろ自分の思想を首尾よくお伝えできたとしますなら、私がわれわれに欠けているものが知識だけであるとは決して考えていないと、あなたに信じていただけたことと思います。たしかにわれわれにとって知識が多すぎるといえることはありませんが、ある時期には、他の国々において何世紀もの間かかかって蓄積され人々の思うままに利用されてきた、かかる長大な精神的な財宝をなしですませることも必要なことです。さしあたってわれわれに必要なのは別なものなのです。かてて加えて、たとえもしわれわれが研究と思索によってわれわれに欠けている知識を獲得することができるとしても、一体何処から生きた伝統だとか、広い経験、過去の深い認識、しっかりとした精神の慣習といったものを身につけることができましようか。すべてこういったものは、全人類の能力のおどろくべき努力の結果なのですし、ヨーロッパの諸国民の精神的本質を構成し、彼らに卓越性を与えているところなのですから。ですからわれわれにとって目下の急務というべきは、思想の領域を広げるのではなくて、われわれの思想を正し、これに新たな方向を与えることにこそあります。奥様につきまして申すなら、何よりもまず新たな生活環境が必要なのでございます。その中において、あなたのお考えの中にたまたま生まれた新しい思想と、この思想によってあなたのお心の中に惹起された新しいのぞみとが現実化し得るような環境が必要なのでございます。あなたはご自分に新しい世界をお創りにならねばなりません。その時にはあなたが現にお住みになっている世界はご自身にとってもはや無縁なものとなりましよう。

まず最初に申し上げるべきことは、われわれの心の状態というものは、たとえ如何に高くをのぞんだとしましても、必ずや周囲の情況に依拠しているということでございます。ですから社会と家庭におけるご自分の立場というものをお考えになって、あなたのお気持ちを生活様式に、お考えをご家庭での諸関係に、ご信仰を日ごろごらんになっている人々の信仰に一致させるよう、できる限りやっごらんになるようにお心をきめる必要がございます。

禍の多くは必然性にさからってわれわれの心の奥底に生まれいでたものが、社会のあらゆるもの制約に従わざるを得なくなったところから起ります。あなたは首都に住むこと

1) ガガーリン版によってではなく、本版によって第二書簡とされるこの書簡は、序文ともいべき第一書簡と密接に結びついている。第一書簡は「この次はこれ程長くお待たせすることはなかるうかと存じます。早速明日にでも筆を執る所存でございます。」との言葉で終わっているが、この書簡は「若し私がさき頃自分の思想を首尾よくお伝え出来たとしますなら……」という言葉で始っている。第二書簡はほとんど等しい部分から成る二つの部分にはっきり分けられる。第一の部分は第一書簡と同じスタイルで書かれ、チャアダーエフの手紙の相手に対するくわしい忠告や、ロシアの現実と歴史からの考察や実例が述べられている。この部分においては、八つの全書簡の中でも多分最も痛烈な指摘と悲痛な訴えが聞かれる。第二の部分ではすでに哲学的な考察がなされ、次の書簡につながっている。(III.)

哲学書簡

が資力のゆえにできないとおっしゃりますが、それが何だというのでしょうか。あなたには立派な邸宅が領地におありになるのですから、何故そこにずっとながく落着かれないのでしょうか。これは幸せなさだめというものですし、このようなさだめから、きわめて教えるところ多い哲学の教訓といった利点を汲取るのは、まったくあなたご自身にかかっているのです。どうかご自分の避難所をできるだけ好ましいものにし、美しく飾り立てなさいまし。どうしてその中にいくつかの洗練されたご趣味や装飾を加えて悪いことがございましょうか。このことは特に感傷的だからというのでは決してなく、あなたのお心づかいが卑俗なものに満足されることなく、ご自分の内面的生活に没入することを可能ならしめるという目的を持つことになるからなのです。どうぞこういった外面的なこまごましたことを軽蔑などなされませぬように。²⁾ われわれの住んでいる国と申すのは、理想というものが実に貧弱にしか現われることがないので、もしわれわれがいくらかの詩とよき趣味とを家庭生活の中に取り入れませんと、感情の美しさとか優美なものに対する理解といったものが、すべて失なわれてしまうのです。われわれ自身の文明のもっとも驚くべき特徴の一つは、あらゆる生活上の快適さとか楽しさといったものを軽蔑することです。われわれはやっとのことで季節季節のさし迫った急務とたたかっていますが、この国におけるかかる事実が、思考する存在（人間）の生活にとって果して前もって予見されていたのかどうか真剣に自問せねばなりません。かってこのようなきびしい風土に定住したという軽率さをおかしたとしましても、このきびしさを忘れるために、せめて現在においてわれわれはこの地に定着すべく努めようではありませんか。

私はかってあなたが多大の満足をもって、プラトンをお読みになったということを出します。古代の賢人の中でももっとも完全ですぐれた人が、自分の哲学劇の登場人物を如何に入念に生活上のあらゆる幸で取囲んでいたかを思い起してみてください。これらの人物は、うっとりするように景色のよいイリソスの川沿の道やグノソスの糸杉の並木道を逍遙したり、樹齢をおびたプラタナスの涼しい木蔭で休んだり、あるいは花咲く森の小道で快よい休息を取るかと思えば、日中の熱さの衰えるのを待って、馨しい大気と静かで涼しいアッチカの夕べを味い楽しんでいるのです。³⁾ 彼らはまた花で頭を飾り、手に手に杯を持って思い思いの姿勢で食卓の周りに横になっていることもあります。⁴⁾ 作者はすべてこれらの道具立をこの地上において描きながら、自ら住みたいとのぞんでいる彼の世にまで高めているのです。教父のうちでももっともきびしいといわれる聖ヨハネス・クリュソストモス⁵⁾ や聖グレゴリウス・ナツイアンツス、⁶⁾ さらに聖ヴァシリウ

2) チャアダーエフのキリスト教理解にとって、ここで述べられているように禁欲主義に対する否定的な態度は極めてはっきりしている。(III.)

3) これらの自然描写は多分プラトンのバイドロスからとったものであろう。(III.)

4) この一節はプラトンの饗宴を想起させるが、これについては第七書簡でも述べられている。プラトンについてチャアダーエフは既に知られている書簡(第六・七)でも何度か触れているが、第三書簡(ここでは名前こそあげていないが)及び第五書簡においてより重要な記述がみられる。チャアダーエフの蔵書中のプラトンの著作は主にシュライエルマッハの注のついたドイツ語訳であるが、この中いくつかの対話にはチャアダーエフの注意書が付されている。(III.)

5) св. Иоан Златоуст, Iohannes Chrysostomos (347頃-407). コンスタンチノーブルの総大司教。雄弁をもって名高い。すぐれた福音書講話を残している。

6) св. Григорий Назианзин, Gregorius Nazianzus (330頃-389), ナズイアンズ, コンスタンチノーブルの主教。聖ヴァシリウスの友にして、説教集, 書簡, 詩を遺している。

ス⁷⁾の著作の中においてすら、孤独の世界についての見事な描写があることをあなたに指摘することもできましょう。これらの人々はこのような世界の中に憩とすぐれた靈感とを見出し、信仰の巨星と仰がれるにいたったのでした。これらの聖人たちは、人生の中の大きな部分を占めるこういった事柄に没頭することが、自分たちの尊厳を傷つけようとは思っていませんでした。われわれはこういった人生の幸せに対して無関心でいて、しかも時としてそのことを手柄としていますが、こういった無関心さの中には実際には何かシニカルなものがあります。わが国において進歩が阻まれている理由の一つは、家庭生活に芸術がまったく反映されていないということに帰せられましょう。

ですからこそ、私はあなたがご自分の避難所をできる限り美しく飾り立てて、この中で完全に釣合のとれた整然たる生活様式を確立されることを望みたいのです。われわれはおしなべて、秩序とか論理的一貫性に対する意識を欠いていますが、このような短所を改めようではありませんか。規則立った生活の利点について再びとやかく申す必要はございません。いずれにもせよ、一定の規則にたえず従うことのみが、われわれに努力せずして自然の最高の法則に従うことを教えてくれるのです。しかしある一定の秩序をしっかりと維持するためには、これを妨害するすべてを斥けることが必要です。あらかじめ予定していた仕事の一つが、朝早くから駄目になりますと、その日一日がすっかり駄目になってしまうことがよくあります。一日を他の日から完全に切り離してしまう死の如きものに次いでは、われわれの感じた最初の印象、はじめての体験ほど大切なものはありません。このような印象や思想は、われわれの一日の心の状態をあらかじめ決めてしまうからです。家庭においても罵り合うことで一日が始まり、改めることのできない誤ちで一日が終ることがあります。ですから一日の最初の何時間かをできるだけ意義のある厳かなものとして、お気持ちをできる限り高いものに持たれて、この時間を完全な孤独の中にすごすよう努力なさることです。あまりにも自分に大きな影響を与えたり、心を散らすようなすべてのことはお避けになることです。このような準備をなさいましたら、あなたは後になってでっくわしたり、あるいは他の状態においてあなたの生活を勝つ見込みのない絶えざる戦に変えたりするような、不愉快な印象にもお心をわずらわされなくなることでございましょう。その上、ひとたびこの時間をうっかり過されますと、もはや孤独になって一心不乱に思索する時間は取戻せないのです。生活の楽しかったり面白くなかったりする思いわずらいにかかりつきりになって、それこそあなたは浮世のよしなしごとの果しない車の空転に巻込まれてしまうことになります。われわれが自分自身であり得る、この一日のひと時を、いたずらに過すようなことはなさいませんように。

私自身、この毎日の精神を集中し心を鎮めることの必要さに大きな意義を与えていることは、よく承知しています。と申しますのも、私は、周囲の環境に巻込まれないで身を守るためには、他に方法がないと信じているからでございます。あなたの全生活を貫ぬいている一つの思想が、常にあなたの前にあって、一日のすべての時間を通じてあな

7) св. Василий, Basilus (330頃-379), ギリシャ教会の教父にして修道制度の創始者の一人。教義、道徳に関する「書簡」がある。

哲学書簡

たの光明となるべきなのです。われわれは精神的幸せの漠然とした本能をもってこの世に生まれ出て来ました。しかしこのような幸せを完全に識るのは、かかる本能から発達して全生活の流れとなったより完全な思想の中においてのみなのです。この内面的な仕事のためには、すべてを犠牲に供さねばなりません。あなたはご自分の生活の全秩序をこれに準じてお立てにならねばならないのです。しかも、こういったことはすべて心の中で人知れず行なわれなければならないのです。と申しますのも、世の中の人は深遠なことがらにはまったく共感を抱いていないからです。世人というものは、偉大な信念に対しては目をそらせ、深遠な思想にはうんざりしているものなのです。あなたにとって必要なのは、さまざまな人の意見によって左右されずに断固としてあなたを目的に導くところの、確固とした感情と集中した精神なのです。感覚的な喜びから社交界を羨んだりなさらず、ご自身の孤独の中に社交界の人々の理解できない喜びを見出されることです。このような澄みきった生活の環境をわがものとなさいましたなら、あなたはきっとその静かなお住いから、如何に騒々しくとも世の中をゆったりとした気持でご覧になり世のことは問題にはなさらずに、喜びをもって心の安らぎを楽しまれるようになられることと思います。あなたの新しい生活様式の、趣味とか習慣とか義務といったものは、このような中にこそ獲得されねばなりません。生活を破壊し歪めるすべて無益な好奇心は、これをお避けになることです。第一になすべきことは、新奇なものに夢中になったり、目先の問題を追かけて、次に何が起るか胸をわくわくさせて待ったりするような、なかなか直らぬ心の習癖を改めることです。そうしませんと、あなたは安らぎも幸せも見出せずに、ただ幻滅と憎悪のみをお感じになることになります。あなたはご自分のお住いの敷居から、世間の煩しさが流込んでくることをお望みにはなりません。もしそうでしたら、あなたの魂から、俗世間の出来事にかかずらうこういった情熱や、目先の新しさによって起される神経の焦立ちといったものを、すべて排除してしまわねばなりません。あらゆる騒音と世間の反響に扉を閉ざすのです。そしてもしできることなら軽薄な文学はすべてこれを自らに禁じてしまうことです。と申しますのも、これらはその本質からいって、書かれた騒音にほかならないからです。私は、規則正しい知的習慣にとって、新奇な書物を読むことほど有害なものはないと思っています。真剣に考えたり深く感じたりすることができなくなったために、その書くものといえば、あらゆることに手を出すかわりに何物も深くは掘り下げず、すべてを安請合して一つも実行せず、すべてが疑わしい偽りの調子を帯びていて、全部ひっくるめて読んでも後には空虚さと曖昧さしか残らぬといった、目新しい作品しか書かぬ人々はよく見かけられるところです。もしあなたが御自分のお選びになられた生活形態の中に満足を求めていられるのであれば、新奇なことには耳をかさないように努力せねばなりません。

あなたが御自分の趣味や欲求をこの生活形態に一致させればさせる程、よりよく自分自身について覚られることは疑いないところです。内面的なことがらを外的なことがらに、可視的なものを不可視的なものに、しっかりと結びつければつける程、それだけあなたは御自分の前途を容易ならしめることになるのです。とは申せ、ご自分の前に待っている困難に対し目をつぶることがあってはなりません。われわれにとってかかる困難

は、数えることのできない程多くございます。われわれの所には、生活の車輪が一定の乗りならされた轍に従って進むといった、踏みならされた道は存在しないのです。あるのは押しわけて進まねばならぬ茨と棘の、時には茂みの中の細道だけなのです。ヨーロッパの古くから文明化された国々には、昔から一定の生活様式というものができ上っていました。ですから人はもし環境を変えたいと思ったら、あらかじめ出来ている場の範囲内で自分の欲する新しい枠を選ぶだけでよいわけです。ひとたび自分にふさわしい人生の型というものを選びますと、あとはおのずと人間も物も自分の周囲に位置するようになります。ですから残るのはこれらを適当なすべで利用することだけとなります。しかしわが国では事情は全く違っています。人は新しい環境を自らのものとする前に、どれ程の出費と労力を要することでしょう。周囲の人々に対し、あなたを新しい状況に応じてみるように教え、その好奇心を鎮めようと愚か者に沈黙を強いるためには、どれ程の時間を無駄に使い、どれ程の努力を尽さねばならぬことでしょうか。一体この国において、人は思想の力というものを果して知っているのでしょうか。確固とした信念がさまざまな理由から、何か突然の啓示とか神の御教えといったものを通して、⁸⁾ 習慣的な事物の流れに逆って人の心の中に入り込み、その存在を完全に覆し、自らをして周囲のすべてよりも高めるといった経験を、此の国の誰が体験したのでしょうか。かつてこの土地において、真の自覚というものが心からの応答を惹起したことがあったのでしょうか。(真理への崇拜に身を捧げた人が、果して今迄この国には居たでしょうか。)⁹⁾

一心に信仰に没頭している人がおしなべて、かつて一度たりとも何ものにも心を動したことの無い、かかる群衆の妨害や反対に出っくわすも自然なことと申せましょう。奥様、あなたは、息する空気や足許の土に至るまで、すべてを自分で創り出さねばならないのです。¹⁰⁾ このことは文字通り真実なのです。あなたに仕えているこれらの奴隷たちは、果してあなたを包んでいる空気となっているのではありますまいか。また他の奴隷たちの額の汗の中に刻み込まれている皺は、果してあなたを支えている土壌ではないでしょうか。どれ程多くのことがらと、如何ほどの恐ろしさがこの一語、奴隷！という一語の中に含まれていることでしょうか。これこそは魔の環であり、われわれは誰でも皆この中に亡びるのであり、そこから抜け出る力を持っていないのです。¹¹⁾ これこそ呪うべき現実であり、われわれは皆これにぶつかって碎けてしまうのです。これこそ、わが国において、この上なく高潔な努力と、寛大にして勇氣ある行為とを水泡に帰せしめると

8) ジハレフの書類中からのテキストの翻訳は 此処で終り、チャアダーエフの書類中に保存されていた書簡のテキストが始まる。(III.)

9) シャホフスコイのロシア語訳には、() 内の一節は見られぬが、たまたまその前の頁に掲載されたフランス語の手稿(筆者は不明)の写真には、*Quel homme est jamais voué ici au culte de la verité?* という一節が明らかに読みとれる。J. H., T. 22-24, стр. 20. ファルクもこれを補って訳している。(Falk, p. 89)

10) つい先ほど迄の心を捕える魅惑的な光景の後で、かかる事物の真の状態を述べたこの節を読むことは、奇好に感じられる。最後の二つの言葉によって、著者は多分地主の農奴所有の二つの型態を周到に描いているものと思われる。既に周囲の有毒な空気たる地主の邸内の僕婢と、有毒な土壌たる賦役農民とがこれである。(III.)

11) これらの言葉はグリボイエドフの次の詩句を想起させる。

Я ненавижу слово раб! (私は憎む、奴隷！という言葉。)(III.)

ころのものなのです。これはまたわれわれすべての者の意志を麻痺させ、われわれの善行を穢すものでもあります。宿命的な業苦の下にも、堪え難い重荷の下にもくじけない美しき魂は一体どこにあるのでしょうか。自分自身と絶えず争いながら常に同じ一つのことを考え抜き、他人と同じ様に行動しながらも自分が厭わしくなることのない、強い人間はどこに居るのでしょうか。私は自分でも気付かぬ間に、再び振出しに戻ったようです。しかしもう少しこの問題に立止ることをお許し下さい。そのあとであなたの問題に立戻りたいと存じます。

一体、われわれを悩ますこの恐しい厄災の原因はどこにあるのでしょうか。キリスト教そのものの中にありながら、ロシアの国民が、キリスト教会の極めて典型的な特徴から見離されるといったようなことが、一体どうして起り得たのでしょうか。わが国における、かかる宗教の反作用は何に由来するのでしょうか。私にはその理由がわかりませんが、ただ、われわれが自慢している正教の中にこそ疑わしいものがあるように感ぜられるのです。あなたは、古代の哲学者が誰一人として奴隷の居ない社会を想像したり奴隷制に反対してはいなかったということを御存知と思います。キリスト降臨以前にこの世において、あらゆる賢者の中でも代表的な人物と目されているアリストテレスすら人間というものは、ある者は自由に、ある者は足枷をはめて生れついている、と申しています。¹²⁾ 同時に、ヨーロッパにおける農奴制の廃止というものが、キリスト教のおかげだということも御存知のことと思います。このことはどんなに頑固な懐疑主義者も認めざるを得ないところです。のみならず、解放の最初の機会が、宗教的行為として祭壇の前で行なわれたということ、そして解放状の多くの中に、*Pro redemptione animae*¹³⁾ という表現が見出されるということも、周知の事実です。それから最後にまた、聖職にある者が自分自身の農奴を解放することによって至る所において模範を示したということ、ローマ法皇が、自分の精神的支配下にあるところではまっさきに、奴隷制を廃止するよりにと呼びかけられたことも、よく知られているところです。¹⁴⁾ しかれば何故にわが国においては、キリスト教はかかる結果を生み出さなかったのでしょうか。いやむしろ逆に、ロシアの民が農奴制を受入れたのが、漸くキリスト教徒になった後、まさにゴドゥノフ¹⁵⁾ やシュェイスキー¹⁶⁾ の治下においてであったというのは、一体何故なのでしょう。正教の教会にこそ、この現象を説明させたいものです。

12) アリストテレスの、「政治学」の一卷第五章には次の如き言葉が見られる。「そして生まれる早々から或る場合には相違があって、或るものは支配されるように出来ており、また或るものは支配するように出来ているからである。」アリストテレス「政治学」山本光雄訳、岩波文庫、40頁

13) 「靈魂の贖いのために」。

14) キリスト教の奴隷制度との闘争に関する、このチャアダーエフの言葉を詳細に検討する余裕はないが、(当時)西欧においてキリスト教が、この制度に対し容認し得るもの以上という扱いをしていたことだけは、注意しておこう、チャアダーエフ自身このことに気付いており、外国旅行中、植民地の奴隷制度に反対する、当時としては数少ない闘士の一人だった、Wilburforce (William, 1759-1833) に関するパンフレットを集めている。チャアダーエフは、人間の自由喪失に対する敵意のために、西欧においても、(当時)教会が、奴隷制度と和解しているという点を考慮から外して、自分の言わんとする論拠を、(ここにおいては)利用せんと努めたのであった。(III.)

15) ポリス・ゴドゥノフ、1598-1605年ツァーリの位にあった。

16) ヴァンシーリー・イヴァノヴィッチ・シュェイスキー、1606-1610年のツァーリ。

国民の一部が他の一部に加える、このいとうべき暴力に反対する母親の叫びを、何故に教会があげなかったのか、教会に説明してもらいたいと思います。つい先頃、ボスポラスとユーフラテスに、われわれの砲声が鳴響きました。¹⁷⁾しかし歴史学が、奴隷制の廃棄がキリスト教の功績によるものであることを示しているまさにこの時に、この学問はキリスト教徒たる四千万の農奴が足枷をはめられていることを、疑ってすらいないのです。つまり問題は、人類の中における各々の民族の意義というものは、その民族の精神的な力によるものであって、ある民族が注目を惹くとすれば、それは彼らの起す騒音によってではなく、もっぱら世に与える道徳的影響によるという点にこそあります。今や話を元に戻しましょう。

私は、あなたにとって望ましい生活様式について申し上げましたが、何かあたに禁欲的な孤独な生活を要求していると、お考えになられるかも知れません。しかし、私が申し上げているのは慎ましく、怜悯な生活であって、それは禁欲主義的なモラルの暗い厳しさとは、全く共通するところがありません。私は大衆の生活とは異った、確信に満ちた、目的にかなった思想と感情を伴った生活について語っているのであって、その様な生活においては、あらゆる他の思想とか感情も、かかる確信になることと思います。このような生活態度というものは、人生において許されたあらゆる幸せと一致するものですし且これを要求するものですが、人との交際もかかる生活態度にとって必要不可欠な条件となります。孤独というものは、その中に危険を秘めており、屢々より大きな誘惑が、その中でわれわれを待ち受けてもいます。砂漠の荒野で生活した聖アントニウス¹⁸⁾が、自分の空想の生み出した幻想にまともわれ、悩まされたように、自分の中にもると、人の考えというものは、自らの作り出した偽られる形象によって、どんどん大きくなってゆくものです。しかし、激情や無理強によらずして、規則正しく思考力というものを発展させてゆきますと、俗事の中においてすら、あらゆる誘惑や生活上の心の迷いがことごとく力を失って、心の平衡が保たれるようになるのです。¹⁹⁾

無理強ではなしに、理性のあらゆる働きや心の動きというものを、真と善の思想に結びつけ得るような、柔軟で素朴な心の状態を見出さねばなりません。人はとりわけ、天啓の真理によって、全身が満たさせるよう努めねばなりません。かかる真理のきわめてすぐれた点と申しますのは、それがあらゆる理性的存在にとって近付き易いものであり、更にあらゆる精神の特質と調和するものであるということです。すべての道がこの

17) 「ボスポラスとユーフラテスにわれらの砲声が鳴響き」というこの言葉は、書簡のこの部分が書かれた時期を明示している。ボスポラスの砲声とは、1829年8月のアドリアノポリス占領後、コンスタンチノポリスへ向ったディビッチの進撃に非ずして、多分1829年5月、トルコの首都への糧食の輸送を断つべく行われた、グレイク提督の率いるロシア艦隊の、ボスポラス封鎖を指すのであろう。「ユーフラテスの砲声」とは、勿論、1829年パステーヴィッチの指揮下にプーシキンも進んで加った、エルゼルムの攻略と理解される。第一書簡の日付が1829年12月1日となっており、この事件が1829年の4月から5月にかけてであるという事は、少々奇妙な点であるが、資料をまた別に編集すれば、原稿において比べる事が出来よう。(III.)

18) エジプトの砂漠にあって、悪魔のさまざまな誘惑とたたかったキリスト教の修道士。(251-356頃)彼の伝説は多くの芸術作品に扱われている。

19) シャホフスコイの翻訳では、ここでパラグラフが変るが、写真版のフランス語の草稿では変っていない。(См. Л. Н., Т. 22-24, стр. 24-25)

真理に通じているのです。大衆が深い考えもなしに奉じている、つつましい盲信も、深遠な知識も、質朴にして心からの敬虔さも、靈感に満ちた考察も、魂の高潔な詩も、すべてがこの真理に通じているのです。しかしもっとも単純な道というのは、われわれが自分の魂に宗教的感情の働きをこの上なく強く受けて、自分自身の個人的な力などはすっかり失って、心ならずも何か至高の意志によって善へ心惹かれ、この地上から天上へと引上げられるように感ずる時に見出されるものなのです。自らの力弱さを自覚したまさにこの時にこそ、われわれの精神は異常な力をもって、天上の想いに心の窓を開き、至高の真理はおのずとわれわれの心に滲透してくるのです。²⁰⁾

今迄に何度もわれわれの心の動きの基本的原則について、また自分たちの思想や行為を惹起すところのものについて、振返って見てきましたが、そういうもののかなりの部分が、われわれには全く属さぬ何ものかによって決定され、われわれの中で起った最善・最高のもの、最も有益なるものが、自分たち自身によって起るものでは決してないという事実に着目せざるを得ません。われわれの為すあらゆる善き行為というものも、未知の力に従うところの、われわれ固有の才能の直接的な結果なのです。われわれ自身に由来する行為の唯一の現実的な基礎と申すものは、われわれが人生と呼んでいる、このうたかたの時の間の、自己の利害に関する観念と結ばれています。これはわれわれのみでなく、すべて生を受けているものに共通する自己保存の本能以外の何ものでもなく、ただわれわれに固有の性質によって変るだけなのです。ですから、われわれが何をするにせよ、また自ら感情や行為を如何に利害と離さんと努めても、所詮は、正しくわかっているか、いないか、近いか遠いかの相異こそあれ、常にこの唯一の利害によって動かされているというわけです。如何に熱心にわれわれが公共の福祉のために努力しても、このわれわれ自身によって考え出され、抽象化された福祉なるものは、自らにとって望ましいものにほかなりませんし、自己を完全に滅却することは、決してうまくゆく筈がないのです。他人のために望んでいることでも、われわれは常にその中に自分自身にとって好都合なものをすり替えているのです。ですから人の言葉にその法を表現された至高の理性は、われわれの弱き性^{さが}まで降られて、たった一つのことを命じたもうたのでした。《人に為されんと思ふことは人にも然せよ》²¹⁾と。他のすべてのことと同じように、このことにおいても、至高なる理性は、哲学の道徳的教訓とは反対なのです。哲学は、われわれ自身何が自分にとって有益なのかわかっていないのに、一般的利益について理解出来るとでもいうように、絶対的な善、即ち普遍的な善を理解出来るものとしています。それでは絶対的善とは一体何でしょうか。それは、すべての人がそれに向って自らの使命に努力してゆく、確乎たる法則であります。このことについてわれわれが知っているのは、これだけです。しかしもしこの善についての理解が、われわれの生活を導くべきであるとするならば、このことについてもっと何かを知る必要がないでしょうか。疑いもなくわれわれは、ある程度一般的法則に従って行動しています。然らざる時は、われわれは自らの存在の基礎を自分自身の中に有することになりますが、これは不合理

20) ここから一般的な考察を有する、書簡の第二の部分が始まる。(III.)

21) ルカ伝、VI, 31. マタイ伝、VII, 7

です。しかし、われわれが行動をするのは、自分でも何故とわからずに行っているものであり、この目に見ることの出来ない原動力は、その作用によって知られ、結果において学ばれ、時にはわれわれがこれと一致することもあります。しかし、すべてこれらのことから、われわれの精神的存在の確実な法則をひき出すことは、私たちには出来ないことなのです。乱れた感情、拘束力のない不定形の考え、これ以上のものをわれわれは決して自分のものとする事が出来ないのです。人間の知恵というのは、旧訳中の次のあの恐ろしい嘲弄の中にこめられているものなのです。「視よアダム我等の一人の如くなりて善悪を知る。」²²⁾

以上申しましたことから、あなたがすでに、天啓の不可避たることをお察しになられたのではないかと存じます。これこそ、私に言わしめればこの不可避たることの証拠でございます。人間というものは、調和した不変の法則に従って移り変わる自然の諸現象を自分の目の前に見ることによって、物理的法則を認識することを学ぶものなのです。自分より前の世代の観察を集め、自分自身の経験を確かめつつ、人は認識の体系を形成します。そして、この際に計算という偉大な武器が、この体系を数学的確実さの不変的な形式に表現するのです。この認識の範囲が、たとえ全自然を包括するにはほど遠く、また全事物の共通の基礎の意味にまでは達しなくとも、この範囲内においては全く確実な認識を含んでいます。というのは、かかる認識は存在に関するものであって、その時間的及び距離的長さといったものは、感覚的に認識出来るか、あるいは確かなアナロジーによって予見することが出来るものだからです。要するに、これは経験の領域であって、経験というものが、われわれの理解力の中に入れられた概念に確実性を付与するものである以上、物質的世界はわれわれにとって可知的なものであるわけです。あなたは、この確実性というものが、われわれがある現象をずっと前に予知し得たり、生命のない物質に信じられぬほどの作用を及ぼし得るほどにまで達していることを、よく御存知のことと思えます。

かくて、人間の自由に扱ひ得る確実な認識手段というものが示されたわけです。このほかに、若しわれわれの理性が固有の起源の能力、即ち物質的世界の知覚に基づかざる行動の原理を持っているとしましても、どのみち、この固有の能力は物質にのみ適用され得るわけですから、物質は理性に（物質的領域において、観察というものを）²³⁾ 提供することになります。しかし、精神的領域においては、人は（何に）²³⁾ こういった手段を用いることになるのでしょうか。精神的領域の法則を明らかにするためには、それでは人は何を観察すべきでしょうか。理性の本質ではありませんまいか。しかし理性の本質とは、果して物質のそれと同じようなものなのでしょうか。理性の本質とは自由ではないのでしょうか。果してそれは、自ら定めたある法則に従うものなのでしょうか。つまり、われわれが理性の内外の現象を探究したとて、一体何を知り得るといえるのでしょうか。理性は自由であり、それがすべてです。もしわれわれがこの探究において、何か絶対的なもの

22) 創世紀Ⅲ, 22 (聖書の日本語訳では、アダムのかわりに「^{かのひと}夫人」となっているが、テキストに従って上の如く訳した。)

23) 現存の手稿では、あきらかにここにいくつかの言葉の脱落がある。この箇所と第四・第五書簡のこれに相当する箇所から考えて、括弧の中の言葉を補った。(Ⅲ。)

にぶっかったとしましたなら、われわれの自由の感覚が、たったいまやっとそこから抜け出て来た問題の環の中に、うむを言わずにわれわれを直ちに引戻すことにはならないでしょうか。そして後を振返ったら、もとの場所に居たということにはならないでしょうか。このようなどうどうめぐりは不可避的なものです。しかし、それがすべてではありません。もしわれわれ自身が、理性が即座に認めざるを得ないような、明らかに証明された真理にまで、事実として高まったとしましょう。あるいは、またわれわれが、理性的存在が否応なく認めざるを得ないような、一般的法則というものを実際に発見したと仮定してみましょう。しかし、このような法則や真理というものは、人間の生活のごく一部分、即ち人間の地上の生活にのみ関係するものであって、われわれの全く知らない他の部分とは何の関係もないのです。しかして、この他の部分というのは、如何なる類推によってもその秘密を明らかにすることが出来ないものなのです。かかる法則や真理は、単に人間の存在、そのつかの間のいのちに関するものであるわけですから、どうして精神的存在の真の法則たり得ましょうか。また、たとえわれわれが自分の経験にもとづいて、これらの法則を発見したとしましても、それは精神的存在が経過したある時期の法則となり得るだけであって、この様な場合に、どうしてこれを精神的存在の一般的法則と認めることが出来るでしょうか。このことは喩えて申しますと、もしそれぞれの年齢に応じた治療法があるとすると、子供の病気をなおすためには、大人の病を知るのとは余計なことだと言うのと同じことではないでしょうか。また、青年の生活様式の規範のためには、人間一般に有効なものを知る必要がないとか、われわれの健康状態が、生涯の各瞬間瞬間の健康状態によって決められるものではないとか、あるいはまた、ある時期にわれわれが、それから先の生活において罰せられることなしに、ありとあらゆる気ままなことをやってもよいのだと言うことと同じことになるのではないのでしょうか。このように、青年むき、壮年むき、老年むきの道徳というものを考えて、教育はただ単に児童や青少年にのみ限られるべきだと主張する人に対しては、あなたはどのようにお考えになられるのでしょうか。しかしながら、哲学者の説くモラルとは、まさにこのようなものにほかならないのです。それはわれわれに対し、今日何を為すべきかは教えてくれますが、明日われわれがどうなるかについては、如何なる考えも持ってはいないのです。しかし、もし現在の生活に明日という日が無かったならば、未来の生活とは一体何でしょうか。

以上述べましたすべてのことから、次の結論が出てまいります。即ち、精神的存在の生活は全体として二つの世界を包含するが、われわれの知り得るのはその中の一つの世界だけだということです。そして、人生の瞬間瞬間は、生活が成立しているところの一貫した全時点と密接に結びついている以上、われわれの力だけでもって、この両方の世界に必然的に関係する法則を認識するまで高まることは、とても不可能であることは明らかです。ですから、このような法則がわれわれに無条件に教えられるのは、たった一つの世界、たった一つの事物の秩序がそのもののために存在するといった理性によってなのです。

しかしながら、このように申上げたからといって、われわれの見地からして、哲学者

の倫理学が全く価値を持たないものであるとは、お考えにならないで下さい。このような教えというものが、偉大な素晴らしい真理を含むものであって、それは長い間人々を導いて来たし、今でも心と魂の中におどろくべき反響を見出しているということ、われわれはよく知っています。しかし同時に、かかる真理が人間の理性によって考え出されたものではなく、人類の全生活のさまざまな時期に、天上から人間に鼓吹されたものであることも知っています。これは、自然の理性によって伝えられ、至高の権威によってのみ啓示される場所の、本源的真理の一つなのです。地上の賢者は讃えらるべきですが、光栄は神にのみあるのです。人間は神の光の輝きによってしか歩むことが出来ないからなのです。この光は常に人間の足許を照しているのですが、人はこの輝しい光の由って来る源には気付いておりません。福音書の著者は申しています。「もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。彼は世にあり……(されど)世は彼を知らざりき」と。²⁴⁾

キリスト教の影響のもとに、人間の理性によって得られた習慣的な考えというものは、天上から示されたイデーを、二つの偉大な啓示たる新訳及び旧訳聖書の中のみ見ることを教えはしましたが、われわれはそもそも最初の啓示というものを忘れているのです。しかしながら、この神と人間の最初の交流をはっきり理解しませんが、キリスト教に関しては何も理解することが出来ないこととなります。自分自身の規範の中に、精神的存在の偉大な謎の解明を見出し得ぬキリスト教徒は、おのずと哲学者の教えに傾いてゆきます。しかし哲学者というものは、人間を通してのみ人間を説明することができるだけで、人と神とを分ち、人があたかも自分自身にだけ依拠しているといった考えを吹込むのです。よく人はキリスト教が、われわれにとって知らねばならぬすべてのことを必ずしも説明するものではないと、考えています。そして哲学のみが、われわれに教え得る精神的真理があるかの如く考えていますが、これはとんでもない誤解なのです。神の知りたもうところに代るような、人間の知識といったものは存在しないからです。キリスト教徒にとりまして、人間精神のあらゆる働きは、神の世界への絶えざる働きかけの反映にほかなりませんし、この作用の結果を知ることは、人間の手にその信仰を堅固ならしめるための、新たな証明を与えるにすぎません。キリスト教徒と申すものはさまざまな哲学体系や人間の努力の中に、社会のいろいろ異った状況、段階に相応するところの、人の世の精神の力の多少なりとも完全な発達のを見るものです。しかし、彼が人間の宿命の秘密を見出すのは、決して人間理性の不安定で不確実な動揺の中にではなく、その源が神の御胸に秘められた教えが人類に遺したところの、信条と深奥な表現の中においてなのです。神は自らの教えの中に、次第に地上の思想が流込んで来るのを見つめていられます。そして、その御手でもって人間をお創りになられた日に、人間にさとされ給うた最初の御教えが、そこに多少ともはっきりとした跡をとどめていることを見出されるのです。神は人間精神の歴史について考察され、そこに超自然的な輝きを認められます。この輝きこそ人間の理性が好んで自らを覆っている雲霧や闇のすべてを貫いて、神の知られぬ間に人間理性を絶えず啓発しているものなのです。神は天から

24) ヨハネ伝, I, 9, 10

哲学書簡

地上に下った、この全能にして抹殺することの出来ないイデーに至るところに認められます。そしてこのイデーが無かったならば、ずっと以前に人類は自らの自由の中に迷込んでいたことでしょう。そして最後に一言付加えますと、神がより現代に近い時点において人類に知らしめることに同意されたより完全な真理を、人類がまたしてもこれらのイデーのおかげで把握出来たということをも、神は知っておられるのです。

ですから人は、自分の頭の中におさめられた全知能をわがものとせんとするのではなくて、人類の全世界史の中にある主の道を、出来る限りよく理解せんと努力すべきなのです。人はひたすら神の国の伝統にのみ思いをこらすべきであって、この伝統を人間が歪曲したことなどは二義的なことでしかありません。かくするならば必ずや人の考えの果しなき海のさ中で、導きの星によっていつも正しい航路をとっている、救いの船の確かな舵があるということ、きつと人は理解することでしょう。この導きの星は、決して黒雲によって覆われることなく、とこしえに輝いているのであり、誰の目にも、またどこでも見ることの出来るものなのです。それは、昼も夜もわれわれの頭上にあるものなのです。そしてひとたび人間が、精神的世界の全秩序というものが、神がわれわれの魂に吹込まれた最初の知識と、これらのイデーにわれわれの理性が加えた、反作用の結果であることを理解したならば、かかるいしずえが、時代から時代へ、世代から世代へと保持され受継がれることが、特別の法則によって定められているものであることも、人間にとって明らかとなることでしょう。又聖なる櫃の中に真理の不変な印があるように、地上のそこそこに散在する聖なる場所に、いくつかの目で見ることの出来る印があるのだということも、当然理解されることと存じます。

奥様、後になって流入さるべき新しい真理を自らのものとすべく世界が成熟するよりも以前に、自己自身の発展による人類の教育が終ってしまったのですが、まさにその時に、混沌としてはいても深い感情が、少数の選ばれた人々をして、折にふれて、軌道に沿って運行する真理の星の輝しい軌跡を予知することを許したのでございます。このようにして、ピタゴラス、ソクラテス、ゾロアスターといった人々、就中プラトンは名状し難い光を見たのであり、彼らの額は常ならぬ光の反射に照らし出されているのです。黒雲を見つめている彼らのまなざしは、どこから新たな太陽が昇るかを凝視し、かすかな曙の光をある程度まで認めたのでした。しかし、その彼らとても、絶対の真理の認識までは高まることが出来ませんでした。というのも、人間がその本性を変えてしまったこの時代において、真理はその輝きの中に姿を見せることがなかったからであり、それを覆っているもうろうたる霧を通して、真理を認めることは出来なかったからであります。しかしこれとは反対に、もし今日人が未だこの真理を認めないならば、それは自らすすんで目をふさいでいるからであり、もし確実な道から逸脱するならば、それは真理とより固く結びつかんとする唯一の目的を心の中に残しておいて、あいまいな原理に身を屈することにほかならないのです。

奥様、もとよりあなたは以上の考察が何を目的としたものであるか、見当がつかれていることと存じます。今まで述べましたことから、結論はおのずと明らかでございます。以下において、われわれはこの結論を考えてみましょう。私はあなたが苦もなくそれら

をご自分のものにされることを信じております。しかしわれわれは、もうこのたび途中で見て来たような逸脱によって、自らの思想を中断させたいとは思いません。それよりもっと一貫した体系的な話合が出来ると存じております。では、奥様、失礼いたします。²⁵⁾

- 25) すでに知られているように、チャアダーエフは（哲学）書簡を第三書簡から公刊せんと考えていた。しかし、その後この計画を変更して、第一書簡から始めんと決心したが、この時おのずと、第二書簡を出版すべきか否かとの疑問が起った。審問に際しての、ナチュージンの証言によれば、チャアダーエフは第二書簡の出版を取止めて、第三書簡を直ちに第一書簡の後に印刷することに決めていたという。そして周知の如く、この第三書簡は組版されて「テレスコープ」の次の号に掲載される予定となっていた。序文で述べたように、この校正刷が今日まで伝っていることが、このことを証明しているのである。チャアダーエフが、この第二書簡を出版することを止めた理由が、この書簡の宛先である女性への忠告と、彼女の運命との明らかな不一致によるものであるか、または検閲の見地からみて容認し難いとされた第一書簡に対する酷評によるものか、それとも第三書簡以下で度々繰返している主張が、この第二書簡では弱いと考えたことによるかどうか、そのいずれとも決めることは難しいことである。いずれにもせよ、この書簡の中にはチャアダーエフの考えの特質が多く見られる故に、今日全書簡を公刊するにあたって、これを棄てることは出来ない。(III.)

《第三書簡》¹⁾

Absorpta est mors ad victoriam²⁾

宗教についてのわれわれの考察は、哲学的な論議へ移ったあとで、再びもとの宗教的思想へとわれわれを立戻らせました。今ここであらためて哲学的見地に立つことといたしましょう。われわれは未だこの問題を論じ尽してはおりません。宗教的な問題を、純粹に思弁的な光の中で考察することによって、われわれは哲学的問題を宗教によって最終的に解決するだけとなります。その上、如何に信仰が固いものであっても、理性というものは、それ自体の中に含んでいる力に依存し得べきものなのです。更にまた魂の中なる信仰が、必要とあらば理性の中に論拠を見出さねばならぬといった魂もあります。そして私には、あなたがたまたまこのような魂の一人であるように思われるのです。あなたは余りにも学校で教える哲学に慣れていらっしゃるようです。そしてあなたの信仰は未だ目も浅く、あなたの習慣は、純粹な敬虔がおのずとその中で育ち満ち足りるといった、あの孤独な生活とはほど遠いものですから、あなたは感情だけに導かれるということが出来ないのです。あなたのお心は、議論なしには満足されることはないでしょう。多くの啓示が感情の中に秘められ、偉大な力が心の中に宿っていることも確かですが、感情がわれわれに働きかけるのは、ほんの一時であって、これによって生まれた感動も永く続くものではありません。これとは反対に、思考によって獲得されたものは、常にわれわれに残ります。精神状態がどうであれ、とくと考えられた思想は、決してわれわれから離れることがありませんが、単に感情にあふれた思想というものは、不安定で変りやすいものです。すべては、われわれの心臓の脈打つ力の強さにかかっているのです。その上心臓は人の好みにしたがって与えられるものではなく、それがどんなものであっても人は我慢しなければなりません。理性は、われわれがたえず創り出してゆくものなのです。

あなたは御自分が、生まれつき宗教的生活にむいているとおっしゃっています。私は一再ならずこのことについて考えてみましたが、どうもあなたが間違っているように思われます。あなたは、たまたま起った確かならぬ感情や、移り気で夢見がちな空想を、自然の要求と取り違えていられるのです。これは間違いなのであって、この様な不安定な情熱をもってしては、真の使命に没頭することはとても出来ません。人生において、一たびこのような使命が見出されたならば、人は自分の運命を確固たる決心と不動の確信をもって甘受せねばなりません。もとより、自己自身を改善することは、可能であり、

1) 文学的にみて、最もすぐれているこの書簡の全体のプログラムを、著者は書簡の冒頭の言葉の中に述べている。ここにおいて著者は、今までずっと論じて来た、人類の運命に関する問題を、哲学的見地から考察せんとしているのである。書簡の末尾において著者は、自分にとって最も価値あるものと考えていた、精神的発達の理想について、また歴史的発展の一般的目的とその究極的目的についての自己の思想を開陳している。第一・第六・第七書簡と異って、チャアダーエフがこの書簡の中では、これらすべての動きの中での教会の役割については、全く言及していないのは注意すべき点である。(III.)

2) 「死は勝に吞まれたり」コリント前書 XV, 54

必要ですらあります。キリスト教徒にとって、かかる可能性を信じ、この点についての自分の義務を自覚することは、信仰の趣旨でもあり、最も重要な期待でもあります。キリスト教の教えは、あらゆるものの総体を、われわれの存在の可能にして必然的な新生という土台の上に見ています。ですから、われわれの全努力はこのことに向けられねばならないのです。しかしながら、われわれの老いたる存在が朽ちてはて、自らの中にキリストによって創造された新たな人間が生まれつつあることを感じないでいるかぎり、この望ましい変換を早くするために、われわれはあらゆる手段をこらなければならぬのです。と申しますのも、われわれが全力を尽くさなければ、この変換はやって来ないものだからです。

しかし御承知のように、私どもはここで全範囲にわたって哲学を究めるつもりはありません。われわれの課題はもっとつつましいもので、哲学の包含するものが何であるかではなく、哲学の中に含まれていないものを見出すことにあります。信仰あつき心にとって、これは人間の学問を理解し、役立たせる唯一の方法なのですが、同時にこの学問が何であるかを知り、出来る限りこれをわれわれの信仰の見地から考察することも必要です。

モンテーニュは言うております。「服従こそは、天に在す至上至仁なるものを認むる理性ある靈魂の主要なる義務である」³⁾と。御承知のように、彼は信仰厚き賢者とは見なされておりません。しかし、懐疑主義者のこの思想をして、今度はわれわれの導きの書たらしめようではありませんか。敵の陣営から味方を引入れることはよくあることですし、これは敵側の力を全く無力たらしめることにもなります。

第一に、理性には従属的な理性しか存在しません。これは全く疑問の余地のないところですが、しかしこれがすべてだというわけではありません。人間を見てごらん下さい。人間は一生の間、自分が従属すべき何ものかをさがし求める以外、何もしていないのです。最初人は、自分以外のすべてのものを動かしている力とは違った一つの力を、自分の中に見出します。それとともに、人は（この中なる）⁴⁾力が、無限のものではないことを確信するに至って、自己のつまらなさに気付くようになります。この時人間は、自

3) 「随想録」第2巻、第12章「レイモンスボン弁護」。関根秀雄訳、白水社、1950、p. 839。

(哲学書簡においては)、通常フランス文学の引用は原文で行なわれているが、ここでもチャアダーエフは原文で引用している。ここで引用されているモンテーニュの著作は、チャアダーエフの蔵書の中にあるが、この引用箇所は、他のいくつかの箇所とともに、チャアダーエフによってアンダーラインが引かれている。本文のコンテキストは以下の通りである。(III.)

「各人の義務の観念は、それぞれの判断にまかしてはいけない。それは規定すべきであって、勝手に選択させるべきではない。そうしておかぬと、我等の理性や意見は無力にして限りなく雑多であるから、しまいには我等は、エピクロスがいうたように、我等をして相食ましむるような義務をでっち上げることになろう。神が人間に与えた最初の法規は、絶対服従の法規であった。それは簡単明瞭なる命令であって、人間はそこに、何も知ったり論じたりするに及ばなかった。何となれば、服従こそは、天に在す至上至仁なるものを認むる理性ある靈魂の主要なる義務であるからだ。服従と謙譲とよりは、あらゆる徳が生れる。自負よりあらゆる罪悪が生れるように、処が之に反して、悪魔の側から人間性の上に来た最初の誘惑、その最初の毒は、彼が学問知識について我等になしたる「汝等、善ト悪トヲ知リテ、神ノ如クナルベシ。」(創世紀)という約束に依って、我等の間に浸み込んだ。」「随想録」関根訳、pp. 838-839

4) ジャホフスコイの補足

己の外にある力が自分を支配していて、これに服従せねばならないということ、そしてこのことの中にこそ自己の全生活があるのだと気付くのです。一つはわれわれの中であって不完全な力であり、もう一つはわれわれの外であって完全な力であるという、二つの種類の力の認識が、理性の最初の目覚めからおのずと人間の自覚の中に滲込んで来るのです。そして、たとえこういった認識が、われわれが五感で感じたり、他人との交わりに際して与えられる認識ほどは、はっきりと一定の形をとったものとして感じられなくとも、私達が善・悪・徳行・法則などについて、又それらの反対物について抱いている思想というものは、われらのうつろい易き本性や、動揺し変りやすい意志や、また不安定な欲求の対象とは関係なきものに服従せねばならぬと感じているところから生まれてくるものなのです。われわれの積極性というものも、自らをして一般的秩序、従属の秩序の中にあてはめんと力のあらわれにほかなりません。私共がこの力に同意しようと反対しようと、所詮は同じことなのであって、私達は永久にこの力の下にあるのです。ですから私達にとって必要なのは、この力の自分達に及ぼす働きかけに対して、出来るだけ正しい説明を自分自身にするよう努力するという事だけです。そして一度この力について何ごとかを識ったならば、今度は安らかな確信をもってこの力に身を委ねるのです。私達が自分達の上に働いていると気付いていないこの力は、決して誤ることなしにあらゆるものを予定の場所へ導いてゆくのです。至高の力のわれらの本性への働きかけを、如何にして開始するかという、人生の重要な問題は、このことの中にこそあるのです。

われわれはこのように、精神的世界の根底を理解しています。そして、ごらんの如くそれは物質的世界の根源と完全に一致するものなのです。自然に関しては、この根源はあらゆるものが服従せねばならぬ打克ち難い力のように見えますが、われわれに関しては、それは私達自身の力と一緒に働き、またある程度は私達の力によって変えられる力にすぎないのです。われわれの人為的な理性を世界に付与した際の、論理的な形というものはこのようなものです。しかしながら、私共に最初に与えられた世界理性の分前を、勝手にすり代えたこのような人為的な理性というものは、私達の目に屢々対象ありのままではなく、歪めて見せるところの悪しき理性ではあっても、われわれから、自由に服したり、私達のために作られた法に服することの重要性を認識する能力を奪って、事物の絶対的秩序を世界の一般的法則から曇らせてしまうほどのものではありません。ですから、この理性は、私達が物質的秩序に関してと同じ様に、自由を与えられた現実として受取り、恭順を精神的秩序の真の現実として認識することを、決して妨げるものではないのです。かくの如く、人の全知力とその認識方法は、この恭順にのみ基づいているのです。人は恭順であればある程強いのです。そして人間理性の前には、たった一つの問題、即ち、何に恭順であるべきかという問題だけがあります。この全知的・道徳的行為の至高の原則を放棄しますと、われわれは直ちに背徳的な考えや非道徳的な考えに陥ってしまいます。真の哲学の使命は、第一にこのような観点を強化し、ついで人生においてわれわれを導くべき光がどこから来るかを、明らかにすることにあります。

何故に、理性はその如何なる行為においても、例えば、数学的計算ほどの高さにまで

到達しないのでしょうか。それでは、計算とは一体何でしょうか。それは、思考する意志の働く余地のない機械的作業であり、知力⁵⁾の働きであります。それでは、数学における分析のこの驚くべき力はどこから来るのでしょうか。それは、知力がここではある規則に完全に従って働いているということに由来します。又物理学においては、観察が何故にかくも多くのものをもたらすのでしょうか。それは、観察というものが人間理性の本来の傾向を克服して、これに思考の常の歩みとは全く反対の方向を与えるからなのです。更にそれは、理性をして自然との関係において、本来そうあるべき従属状態にしているからなのです。⁶⁾ 自然哲学は、どのようにしてその高き信憑性に迄到達し得たのでしょうか。⁷⁾ それは理性をして、全く従属的にして否定的な働きに迄もっていったからです。最後に、この哲学にかくも巨きな力を付与せる、すぐれた論理の働きとは一体何なののでしょうか。それは理性を鍛え、これを全世界にわたる服従の輓に繋ぎ、更に理性をして自らが探究している自然の如き、盲目にして従属的なものになしているのです。ベーコンは言っています。人間にとって、自然を支配すべく開かれた唯一の道は、天国へ通ずる道にほかならず、これに入るには、幼児の如き従順さによってのみ可能であると。⁸⁾

議論を進めましょう。一体論理的分析⁹⁾とは、理性が自らに課した強制以外の何ものであり得ましょうか。理性に意志を付与してごらん下さい。それはもっぱら総合的に働くことでしょう。分析的方法によっては、格別に努力した際にのみ、われわれは前進することが出来ます。というのも、私達は常に自然な道、即ち総合的な道に踏み込みがちだからです。人間理性は総合から始まりましたが、この総合こそ古代の学問の特徴なのです。しかしながら、総合が如何に分析よりも自然で合法的なものであり、又時にはそれ以上のものであったとしても、従属の過程、即ち分析のプロセスこそ、思想の最も積極的なあらわれなのです。他方、注意深く事実を見るならば、自然科学における偉大な発見というものが全く独立した直観、即ち総合的な原理に起因するものであることをも見出すでしょう。しかし、たとえ直観というものがその本質から言って人間理性の特徴であり、その最も有効な武器の一つではあっても、われわれの他の能力と同様、これを完全に解明することは出来ないという事実は注目すべきです。問題はわれわれが直観というものを、他の能力ほど純粹にして単純な形では所有していないということであり、

5) ロシア語の“разум”は“Vernunft”と、“ум”は“Verstand”と翻訳される。(F.)

6) 古代人は何故に観察することが出来なかったのであるか。それは、彼らがキリスト教徒ではなかったからである。(原注)

7) チャアダーエフがその著の中で、「La philosophie naturelle」という言葉に、どのような意味を付与していたかは、全く不明である。彼は、電気、磁気、古生物学等に関する最新の学説を究めんとしていたが、その蔵書中の自然哲学関係の書物の選択は、全くアト・ランダムなものであった。残念ながら、現存の蔵書中には、チャアダーエフが持っていたに相違ないと思われるシエリングの主たる著作は見当たらない。(III.)

8) *Novum organum* (原注); 第68章より引用 (III. F.)

9) ここでは、分析とか総合という言葉が、チャアダーエフによって幾らか異った意味で用いられている。すなわち、分析とは帰納、総合とは演繹の意に解すべきである。「狂人の弁明」の中では、総合とは古代世界の学問の特徴に非ずして、東洋的世界観の特質と考えられている。(С. и П. Т. I., стр. 226) (III.)

且この能力には、至高の理性に属する何ものかがあって、これがわれわれの理性の中に反映しているにすぎないということにあります。ですからこそ、われわれは最も輝しい発見をこの直観に負っているのです。

かくして人間理性というものが、その内部の力のみによって最も確実な知識に迄到達し得るものではなく、必ずやそれが外部から導かれているということは明らかです。ですから、私達の知的能力の真の基礎というのは、本質的に一種の論理的自制にほかならず、それは又倫理的自制と同様に、同一の法則に起因しているのです。

しかしながら、われわれは経験と観察によってだけではなく、思索によっても自然を認識します。あらゆる自然現象は、大前提、小前提、そして結論から成る三段論法と考えられます。ですから、自然そのものが知性に対し、自然を認識するためにたどるべき道を示してくれているのです。従って知性は、自らの前にあらわれる事物の運動の中なる法則に従えばよいのです。このようにして、例えば古代のストア派の哲学派たちは、そのすぐれた予感をもって、自然を模倣し、これに従い、これと調和することについて語ったのでした。彼らは私達よりもあらゆる原理の近くにあつて、われわれのように世界を小さく分割することはなく、ただ精神的世界の基本原理たる、如何なる力も如何なる法則もわれわれ自身によって創られるものではないということ告げたのです。

われわれを行動にかりたてる原理というものは、自分自身の幸福の希求にほかなりませんが、若しも幸福についての私達の考えが単なる空想にすぎないとしたら、人類は一体何に向つて歩んだのでしょうか。その時は、各時代、各民族がそれぞれ幸福について別々の考えを持っていたこととなります。もし人間の心の中に、あらゆる時代、あらゆる国に共通の、というのは人間自から創ったものではない、幸福に関しての唯一つの世界的な理解がなかったとしたら、どのようにして人類は全体としてその無限の進歩をなしとげることが出来たのでしょうか。われわれの行為は何によって道徳的なものたり得たのでしょうか。それは、われわれをして法則に従わせ、真理を敬わせている強制的な感情によってなのでしょいか。しかし法則というものは、われわれから出たものでないが故に法則なのであり、真理は、われわれが考え出したものでないからこそ真理なのです。時としてわれわれは、正しからざる行為の準則を打立てます。しかしそれは、われわれが自らの判断に自己の性癖が及ぼす影響を取除くことが出来ないからであつて、この場合われわれの性癖が法則を自分自身に押しつけて、その結果これを普遍的な宇宙の法則と考えてこれに従っていることになるわけです。もちろん、全く努力せずして道徳の命ずるすべてに一致した行動をとっている人もいます。このような人々は、われわれが歴史上賞讃する幾人かの偉大な個性であります。しかしかかる選ばれた魂にあつては義務の感情というものは、思索を通してではなく、偉大な教示となつて、それと知らずに人々を動かしている秘められた動機を通して発達しているのであつて、この個人的な思想よりはるかに強い動機は、われわれが尋ねずとも生活の中に見出されるものなのです。これはすべての人に共通した思想から出ています。われわれを自分自身以上に高める手本や諸事情の好運な積重なりが、又われわれをかくあらしめ、それなくしては決してかくあり得なかつた全生活の都合よき組合せが、時として知性を驚かすことがありま

す。こういったことは、すべて歴史の生きた教訓であって、ある人々はわれわれにはうかがい知れない法則によって、かかる教訓を身につけているのです。そして、月並な心理学がかかる精神の動きの秘められた働きを説明出来ないとしても、人類の思想の継承を精神的世界の第一原理と見なすより深奥な心理学は、この中に自らの問題の解答の大部分を見出しているのです。¹⁰⁾ また、たとえ善き行為のヒロイズムとか、天才の靈感といったものが、個々の人間の思想に起因するものでないとしても、それらは何世紀もの思想の結実ではあるのです。ですから、われわれが考えようと考えまいと、私達が未だこの世に出現する以前に誰かがすでに考えていたのですから、所詮は同じことです。従って、すべて精神的な行為の基礎には、如何にそれらが孤立し独立したものに見えようと、常に義務の感情があるのであり、これからして、恭順の感情もまたあることとなります。

次に、もし人が完全にその自由を喪失するほど恭順である場合を考えてみましょう。¹¹⁾ たった今述べましたところからも、恭順が人間の徳性の最高の段階たることは明らかです。まこと、人の心の動きというものは、この世のすべての運動を惹起している同じ原理によって起されているのですから、(恭順なる) この時、人は現在のように自然から切離されることなく、自然と融合することとなりましょう。自己自身の意志の感覚は、人をして一般的秩序から切離し孤立的な存在となしますが、この時人間の中に世界意志の感情、言葉を変えて申しますなら、内的な感覚、言わば自分が全世界の一部だという深い自覚が目覚めることでしょう。現在人間は、自己の面前のあらゆる対象をぼかし、自己を取巻くものから自分自身を切離している孤立した思想、個人的原理に満たされています。しかしこのことは、人間本来の性質の不可欠な条件では決してなく、単に人間が自然一般から無理に疎外されている結果にすぎないのです。若し人が現在陥っているその悪しき自我を捨てるならば、他の全世界とはるかな昔から結びついている思想、普遍的な個性、純粋な理性の力を新たに見出しはしないでしょうか。その時になっても未だ人は、自己をしてあらゆることに関与せしめ、世界を彼の人為的な理性のプリズムを通して眺めさせている、この狭小にして貧弱なる生活の中に暮していると感じるでしょうか。もとよりそうではありません。人間は、神が自らを無より創りたもうたその日に神より賜った生活を、新たに始めることでしょう。かつて一人の偉大な天才が、¹²⁾ 人間

10) ここで著者は、第五書簡においてより詳細に発展されるところの考え、すなわち、全体として全宇宙的認識を形成する、認識の継承性について予告しているのである。(III.)

11) 人間の自由の完全な喪失について語りながら、疑いもなく著者は自分の全思想を歪めている曖昧さを許容している。著者は人間の自由を、文句なしに基礎として、また偉大な贈物として認めているが、ここでは単に、孤立化を避け、個々人が世の生活と自由に融合することについてだけ論じているのである。(III.)

12) ここでは明らかに、プラトンが考えられているが、このような思想は、チャアダーエフが熱心に読んだセネカにもみられる。このセネカの著書のフランス語訳は、チャアダーエフの蔵書中に保存されているが、これには彼の手による沢山の注や印が見られる。

失われた世界との交流を、再びわれわれが見出すのは、「全くわれわれにかかっているのがあって、われわれを取巻いている全世界を見棄てることを要求するものではない」とこの節の最後の言葉はチャアダーエフの思想の極めて本質的な部分をなす。このように、死に対する勝利というものは、チャアダーエフの他の言葉とも考えあわせれば、地上の生活の枠内で達せられるべきものと考えられていた。このことは、チャアダーエフがこの書簡に付したエピグラフの意味を理解する上にも重要である。(III.)

哲学書簡

というものは何かよりよい生活についての思出をもっているものだと思いましたが、偉大な思想というものは徒に地上に投げられているのでありません。しかしこの天才が言うべくして言わなかったことは、——ここにこの偉大な天才も他の誰もが越えることの出来なかった、当時の人々の思想の発達の限界があるのですが——この失われた素晴らしいものが再びわれわれによって見出され得るということ、そしてそれは全くわれわれにかかっているのであって、われわれを取巻いている全世界を見棄てることを要求するものではない、ということです。

時間と空間とは、現在かくある人間生活の限界となっています。しかし、誰が一体私に対し、時間の苦しい圧迫から逃れることを禁じ得ましょうか。私は又この時間という考え自体をどこから引出してきたのでしょうか。過去のいろいろな出来ごとの思い出からでしょうか。それでは、このような思出とは一体何でしょう。それこそ意志の働き以外の何ものでもありません。さもなくば、私の全生活中に次々に起った出来ごとは、いつまでも私の記憶中に残ってたえず私の頭を悩ますことでしょう。しかし実際にはこれとは反対に、私が自らの思想に完全な自由を与えている時においてすら、私が覚えているのは、私の感情を波立たせ考えを引付けた、ある心の状態と結びついた思出だけなのです。私達は、過去の姿を未来のそれと同じように創り出しているのです。私の目前でちらついている、未来の変転極りない幻影を思いのままに消し得るようには、私の後にじっと立っている、過去の亡霊を消すことを妨げているのは一体何なのでしょう。現在と呼ばれている、私がそのあらゆる言葉を口にしたその一瞬にもはや存在しない、この中間の一瞬時から脱け出すことを妨げているのは何なのでしょう。われわれは絶えず自分自身を創造しています。そして、このことは疑いの余地がありません。神はまた時間を創られずに、人間がそれを創ることをお許しになられました。しかればこの場合、常に私を取り囲み苦しめている、この時間というはなはだしく有害な思想はどういうことになるのでしょうか。それが私の意識から完全に消え去ることはないのでしょうか。かくもきびしく私を圧迫しているその見せかけの現実が、あとかたなく消え去るようなことはないのでしょうか。（もしそうなったら）私の存在にはもはや如何なる限界もなくなり、無限の視界を妨げるものは何一つとてなく、私の視線は永遠の中に沈んで、地上の地平線は消え去ることでしょう。蒼穹は地上にではなく、わが目前にひろがった無限の野にかかり、私は自分自身を、日とか時間とか瞬間には分割されない無限の中に見出すことになるでしょう。これこそ動きも変化もない永遠に単一の世界であり、その中においてはあらゆる孤立した存在が互いの中に姿を消し去るところの、一言で申すならば、あらゆるものが永遠に存在する世界なのです。われわれの精神が自ら作りあげた桎梏を取り外すならば、その度ごとに精神は、現在ある種の時間の中にあるように、この種の時間に到達し得るのです。何故に精神は、いつも同じ音色の時計の振子によってはかれる、ものごとの刻一刻の変化の蔭で、あくせくしているのでしょうか。精神は何故に、時を打つ音の聞こえない別の世界に、直ちに移ってはゆかないのでしょうか。それはつまり、無限というものが表象の自然の上皮であって、この中にこそ唯一真実の時間があるのに対し、他のものはわれわれが自分自身のために創ったものだけに、知ら

れざるものだからなのです。

空間に話を転じましょう。思想がそこに留っていないことだけは、誰もが知っています。思想は触知出来る世界の論理的な諸条件をまもっていますが、それ自体はこの世界に住んでいません。従って、空間に如何なる実在性を与えましても、それは思想の外にあるもので、そこには精神の本質と共通なものは何一つありません。それは、言うなれば不可避的な一つのフォルムなのですが、それでも、外界がわれわれにその姿を見せる場所の一つのフォルムであるわけです。ですから、ここで問題となっている新しい存在への道を鎖すという点では、空間は時間ほどではありません。

従って、人がそれに向って努力すべき生活とは、完成された、確実にして明らかな、無限の知識の生活であり、そして何よりもまず全き恭順の生活であります。この生活を人はかつて持ったことがあり、未来においても約束されているのです。ところであなたは、これがどのような生活か御存知でしょうか。これは天国であり、そしてこれ以外の天国というのは存在しないのです。われわれは只今直ちにこの天国に入ることが出来るのであって、これを疑ってはなりません。けだしこれは、われわれの本性を所与の条件において完全に更新させることであり、これこそ理性的存在の努力の目標であって、この世界における精神の究極的使命にほかならないからです。私には、私達の誰もがこの偉大な道を歩むべく運命づけられているかどうか、また各自がその光榮ある終極的目的に到達出来るかどうかわかりませんが、われわれの本性を全世界の本質と一致させることだけが、私達の進歩の究極点であることは知っています。というのも、このようにしてのみ、われわれの精神はあらゆるものの完成に迄高揚し得るのであり、これこそまさに至高の理性の完全な表現だからです。¹³⁾

しかし、われわれが未だ自らの存在をあらゆる存在と融合させるという、私達の巡礼の目的にまで致達していない間においても、少なくとも精神的存在の世界に溶け込むということは出来ないことでしょうか。われわれを自分自身と似た存在に一致させることは、ある程度は自分だけの力で出来るのではないのでしょうか。実際われわれは、他人の窮乏や利益を自分のものとし、彼らの感情を思いやって、ついには彼らのためにのみ生き、彼らを通してのみ感ずるといった生き方を始めることが出来ましょう。このことは疑いもなく確かなことです。このようにわれわれが自分の周囲に起るものと、一体となり得るおどろくべき能力を、同情とか愛とか思いやりとか呼ぶことも出来ましょうが、いずれにしても、それはわれわれの本性にとって固有な能力なのです。もし欲するならば、われわれは自分に知られざる精神的世界で起ったことを、自分自身にあったこととして経験し得るほど、精神的世界と同化することが出来るものなのです。そのみでな

13) ここでは次の二つのことに注意せねばなりません。第一に、われわれはこの生活の中に天国が完全に含まれているかの如く主張せんとするものではなく、死は救世主によって克服された日から、もはや存在しないが故に、天国はこの生活の中から漸く始まるということあり、第二には、勿論ここでは時間空間における物質の融合についてではなく、思想及び原理における融合についてのみ語っているということです。(原注)

ここでチャアダーエフは、デカルトとかライブニッツといった哲学上の権威から屢々かりて来た考え、すなわち、生命の肉体と精神という独立せる二部分への分化という考えではなしに、生命の単一性の理解にまで到達している。(III.)

く、たとえ世の出来事がそれ程われわれを悩ますことがなくとも、われらの心臓が全人類の運命をおもんばかってより強く打ち、われらの全思想、全行為がすべての人の思想・行為と調和のとれた一体となって同化するためには、他の人々の行為についての共通の深い思いやりがありさえすれば、人間すべてとの確固とした結びつきの内的な自覚がありさえすれば、それで充分なのです。このわれわれの本性的におどろくべき特徴を育成しつつ、次第次第に心の中においてこの特徴を発達させながら、われわれは、自分たちの前途が一望の下に目下に展開する高みに迄到達することが出来るのです。一度この高みに登って、ここに踏みとどまり、二度と再び登らねばならぬ低き処へ落込まぬ人こそ幸せというべきでしょう。今迄のわれわれの存在というものは、生と死の間の絶えざる動揺であり、長き苦しみでした。今や、真の生活が始ったのであって、この時から真と善の道を歩むことこそ、われわれ丈にかかっているのです。というのも、この時から精神的世界の法則は、私達にとって理解出来ぬものではなくなるからなのです。

しかし、われわれの周囲の生活は果してこのように営まれているのでしょうか。全く反対です。精神的世界の法則というものは、おそくなって、それもはっきりせずに生活の中にあられるものですが、御承知のように、これを物質界の法則と同じように考えることは出来ません。(これはわれわれにかかっているのではないのです。)¹⁴⁾ われわれに対して要求されていることは、かかる認識が私達の知的視野に入った時に、これに対して開かれた心を持つということだけです。日常生活の歩みの中とか、毎日の心労とかよくある心のまどろみの中では、精神的世界の法則は、物質的世界の法則よりもはるかに不明瞭にあらわれます。かかる法則が、完全にわれわれを支配し、私達の行動や知性の働きを一々規定する¹⁵⁾のは確かですが、同時に、何らかのおどろくべき組合せの結果として、間断なく続く奇蹟を通して、¹⁶⁾ 私達の中に独創的活動の自覚を保持し、われわれが為すすべてのこと、心臓の鼓動の一つ一つや、私達の知力が殆ど関知することもない束の間の考えにすら、きびしい責任を課しているということも事実です。それにも拘らず、かかる法則は、われわれの理解の及ばぬところとなって、深い闇の中に陥っているのです。一体これはどうしたことなのでしょう。人は自分が知らずして道具の役を果している、真の原動力もわからずに、自分自身に法則を創り出して、この自らのイニシアティブででっちあげた法則を、道徳律とか**叡知**とか、更には至上善とか単に法則とか呼んでいます。¹⁷⁾ 従ってこれは、人間がその手で作った脆いものであって、その気になれば打毀すことも出来ますし、又事実たえず毀れてもいるものなのです。そして人はそのあわれむべき盲目の中に、自分の存在の真の法則が、すべて確実で、絶対的で不変なるものと考えているのです。しかし人は、その知性を働かしてみただけでも、この秘められた原理に関して、それ以上とは言わないまでも、どうしても不可欠なものだけは理

14) シャホフスコイの挿入。

15) Falk は、ロシア語の определяет (=bestimmt, definiert, verordnet) という訳語が、フランス語の何を訳したのか、残念ながらわからないといっている。

16) チャアダーエフの作品の他の箇所でも見られるように、彼は一方では生活一般の規則が、他方では人間の自由が確固たるものであることを認めながら、それらの原理が一致する道を示すことなく、単にそれらの共存を「間断なく続く奇蹟」と呼んでいる。(III.)

17) 古代の人々を見よ。(原注)

解することが出来るのです、しかしながら、たとえ道德律というものが物質的法則と同じようにわれわれの外にあって、私達の知識にはかかわらぬものであっても、この二つの法則の間には本質的な相異があります。無数の人間が、自然の物質的な動力については少しも理解することなしに生きてきましたし、現在でも暮しています。神は人間が自分の力で、次第にこれらを発見することを望まれたからです。しかし理性的存在は、いかに低いものであろうと、又その能力がいかに劣ったものであっても、自らを行動にかりたてる原理についての、いくらかの理解力は持っているものなのです。思索したり、物ごとについて判断するためには、善悪についての理解が必要です。¹⁸⁾ 人間からこの理解力を奪うならば、思索することも判断することもなくなって、人は理性的存在たることをやめることとなります。この理解力がなかったとしたら、神はわれわれを一瞬時たりとも生かしてはおかなかったことでしょう。神はわれわれを、この理解力を持たせてお創りになられたのです。われわれの魂の中に玄妙なやり方で投ぜられた、この不完全な思想こそ、理性的人間の全存在を形成しているのです。もしこの思想を最初にわれわれに与えられた時のように純粋な形に再現することが首尾よく出来るならば、そこから何が生まれ出るかを、あなたはたった今見てこられたわけです。しかし、もしわれわれが自分自身の本性の中のみ、私達の全知識の原理というものを探し求めるならば、どのような結果になるかということも、考えてみなければなりません。

ソコーリニキ

(1830年)¹⁹⁾7月1日

18) ここでチャアダーエフは、第五書簡で否定している、人間の生得の思想の存在という考えを許容しているようである。かかる不明瞭さは、多分論旨の転換がうまくゆかなかったことによるものであろう。(III.)

19) 序文で述べたように、書簡の成稿が1830年であるということは、ジハレフの収録したチャアダーエフの作品のコピー中に残っていた第三書簡からとった。(III.)